

369
372

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0^m 1 2 3 4 5

始



特237
869



喜久短歌會第四歌集

久

福岡縣小倉高等女學校





目次

職員集

先師追慕……………長澤 由之(三)
日記抄……………北澤 君江(四)
教へ子……………鈴木三七子(五)
九住登山……………松尾 恒二(六)

研究科集

水之江 満珠枝(二) 渡邊 ふみ子(二)
中村 富美子(三) 中神 清子(三)
津田 朗子(四) 三原 温子(四)
濱田 トシエ(三)
福田 榮美子(三)
妹尾 和子(五)

四年集 (いろは順)

井上 慶子(元) 伊木 和子(元)
岩松 善子(三) 磯邊 房枝(三)
市橋 一枝(三) 池尻 益代(三)
市川 美佐子(三)
一丸 葉子(三)
石橋 薫(三)

吉村ハル子(五三)
 武田千鶴子(五二)
 田澤富美子(五五)
 田中スミ(五八)
 田中美穂子(五六)
 田中利恵(五九)
 土谷貞子(六〇)
 中村茂登子(六三)
 長畑弘子(六四)
 直江勉榮(六五)
 村上八重(六六)
 白木淑子(六八)
 上村チトセ(七〇)
 宇山みどり(七一)
 野中綾子(七三)
 藏木典子(七四)
 山本富美子(七六)
 八尋松枝(七七)
 枡屋タマエ(七九)

吉原満壽(五三)
 竹下清子(五五)
 武谷安代(五七)
 立石雪子(五九)
 高橋早苗(六一)
 坪井富士恵(六三)
 塚本時子(六五)
 中川千萬子(六七)
 中川貞子(六九)
 中川良子(七一)
 中村榮子(七三)
 浦上登起子(七五)
 植田マヌエ(七七)
 浦野君子(七九)
 態谷秀子(八一)
 八木延子(八三)
 山口豊子(八五)
 山本ユキ子(八七)
 丸川アヤ子(八九)

田仲芳子(五三)
 竹下静江(五五)
 田島京(五七)
 高木千枝(五九)
 高鶴信子(六一)
 坪根博子(六三)
 長井ユクエ(六五)
 中島澄子(六七)
 長畑百合子(六九)
 長藤千代子(七一)
 武藤千代子(七三)
 村上豊子(七五)
 上田則子(七七)
 内山代美子(七九)
 兎洞秀子(八一)
 國谷常枝(八三)
 八下田徳子(八五)
 山田晴子(八七)
 松本光枝(八九)
 松原久子(九一)

井上ミツ(三三)
 稻田政子(三五)
 石井清榮子(三六)
 池田ノブ子(三六)
 林田正子(三九)
 濱田トシエ(三三)
 丹村光恵(三三)
 都甲千代子(三四)
 富永愛子(三五)
 千々和ミツ子(三七)
 大宮道代(三六)
 大西智恵子(三六)
 小川澄子(三六)
 大津賀マス子(三六)
 和田富貴恵(三六)
 川浪幸子(三七)
 鐘ヶ江美智子(三七)
 兼尾美智子(三七)
 吉田静子(三七)

岩崎博子(三三)
 石崎無津美(三五)
 井上安子(三六)
 飯田光子(三六)
 長谷川千里(三九)
 丹生清子(三三)
 入學美代子(三三)
 登木壽々子(三四)
 豊田和代(三六)
 太田政子(三六)
 奥野峯子(三九)
 小幡道子(四〇)
 岡住アキエ(四二)
 尾形美波(四二)
 和田秀子(四二)
 河村壽子(四二)
 川原とみよ(四二)
 川上綾子(四二)
 吉田稔枝(四二)

岩松フミ(三三)
 井上スズカ(三六)
 伊藤文子(三七)
 原ツメ子(三九)
 濱武英子(三九)
 錦戸まゆみ(三三)
 堀岡清子(三三)
 富田咲子(三四)
 禿河富美枝(三五)
 大路ひさ子(三六)
 奥本久子(三九)
 岡本良子(四〇)
 大和田節子(四二)
 和田ウメ子(四二)
 和田佳枝(四二)
 加生操(四二)
 川本歳恵(四二)
 吉田千鶴子(四二)
 吉原道子(四二)

松崎 君子 (一八)
 前田 房子 (一八)
 前田 時枝 (一九)
 藤田 齊子 (二〇)
 藤山 眞子 (二〇)
 小林 清子 (二一)
 近藤 恭子 (二一)
 古賀 壽美子 (二二)
 江口 博子 (二二)
 荒木 淑子 (二三)
 青木 愛子 (二三)
 佐藤 芳子 (二四)
 坂田 ミサヲ (二四)
 北原 三津子 (二五)
 宮原 麗子 (二五)
 三木 君子 (二六)
 志道 淑子 (二六)
 庄崎 喜久子 (二七)
 柴田 朝子 (二七)

松尾 百合子 (二八)
 前川 初枝 (二八)
 藤木 とし (二九)
 布野 イツ子 (二九)
 藤井 愛子 (三〇)
 小島 俊子 (三〇)
 古賀 静子 (三一)
 小島 輝子 (三一)
 江口 ハマ子 (三二)
 有川 榮 (三二)
 荒木 登美枝 (三三)
 坂本 ヒサ子 (三三)
 佐藤 静子 (三四)
 宮崎 ミキ (三四)
 三村 昌子 (三五)
 宮野 静子 (三五)
 篠原 伊磨子 (三六)
 島田 千代子 (三六)
 重木 雪子 (三七)

松下 敏子 (三八)
 眞鍋 眞砂子 (三八)
 藤田 スミエ (三九)
 藤戸 和子 (三九)
 藤田 茂代 (四〇)
 小出 義子 (四〇)
 國府 比佐子 (四一)
 是石 八重子 (四一)
 安藤 田鶴子 (四二)
 有田 芳子 (四二)
 佐野 昌子 (四三)
 佐生 稻子 (四三)
 清澄 絹子 (四四)
 水野 富士子 (四四)
 宮崎 桂子 (四五)
 宮城 年子 (四五)
 城野 環 (四六)
 島田 アキエ (四六)
 志賀 菊江 (四七)

三年集 (五十韻順)

廣吉 喜美子 (一九)
 日野 ミチエ (二〇)
 廣野 満子 (二一)
 森 節子 (二二)
 森 千歳 (二三)
 元木 正子 (二四)
 杉山 房子 (二五)

東 美也子 (一九)
 日高 節子 (二〇)
 久有 みゆき (二一)
 森 保子 (二二)
 森本 みさを (二三)
 末松 三知 (二四)
 助川 とき子 (二五)

久光 きみ (二〇)
 平岩 トミエ (二一)
 森 敏子 (二二)
 森 千鶴子 (二三)
 盛武 淑路 (二四)
 末次 絹子 (二五)
 角 一惠 (二六)

朝倉 シヅエ (二二)
 井澤 信子 (二三)
 今宮 貞子 (二四)
 牛尾 歌名枝 (二五)
 岡田 房子 (二六)
 尾石 スエ (二七)
 加藤 とき子 (二八)
 河底 朝子 (二九)
 工藤 春枝 (三〇)

有田 艶子 (二二)
 伊藤 好子 (二三)
 上村 美智代 (二四)
 内田 イトエ (二五)
 岡山 美彌子 (二六)
 海津 美美子 (二七)
 川上 初代 (二八)
 北島 百合子 (二九)
 熊本 睦子 (三〇)

安藤 包子 (二二)
 井口 政子 (二三)
 上野 美代子 (二四)
 大松 多津子 (二五)
 大原 玲子 (二六)
 海津 美代子 (二七)
 川崎 道子 (二八)
 切明 笑子 (二九)
 藏本 富子 (三〇)

小林弘子 (一六)	相良幸子 (一七)	佐藤惠美子 (一七)
佐藤小夜子 (一六)	佐成電子 (一六)	澤野和子 (一六)
四宮田セツ (一五)	清水保子 (一四)	周ます子 (一四)
白石ミツ (一四)	城田道子 (一四)	進藤満子 (一四)
鈴木壽子 (一四)	進來泰子 (一四)	高折敏子 (一四)
高倉靖 (一四)	高濱ヨシ子 (一四)	竹内武子 (一四)
竹内八重子 (一四)	竹半淳子 (一四)	田代晶子 (一四)
田中玉江 (一四)	谷口静江 (一四)	檀上昌子 (一四)
辻孝子 (一四)	鶴丸英子 (一四)	露田嘉鶴子 (一四)
戸早久子 (一四)	富田輝子 (一五)	長澤雅子 (一五)
中野笑香 (一五)	中村美知子 (一五)	中村節子 (一五)
中原國子 (一五)	鍋山美佐子 (一五)	西田和子 (一五)
西田保子 (一五)	野中康子 (一五)	野村房子 (一五)
島山千代子 (一五)	畑間サカエ (一五)	早川恭子 (一五)
原田幹江 (一五)	深田ふじ江 (一五)	古野晶子 (一五)
久森靖子 (一五)	藤野敏子 (一五)	星出富美子 (一六)
堀田修子 (一六)	松井スエ子 (一六)	松尾節子 (一六)
松田和子 (一六)	松永和子 (一六)	三根明子 (一六)
皆吉美惠子 (一六)	宮崎昌子 (一六)	武藤節子 (一六)

二年集

室住千枝 (一五)	八百喜美子 (一五)	山内富美子 (一六)
山田淑子 (一六)	山中マサ子 (一六)	吉元浪子 (一六)
網中美佐江 (一七)	浦上千枝子 (一七)	牧野ハル (一七)
山下眞理子 (一七)		

一年集

中村悦子 (一五)	吉井敏子 (一五)	藤野延子 (一六)
進來和子 (一六)	永野敦子 (一七)	伊木玲子 (一七)
中村タヅ子 (一六)	福江マスエ (一七)	松下茂子 (一七)

卷末記.....編者 (一八)

職
員
集

先師追慕

長澤由之

師の墓誌を我が書きをれば温容の今まなかひに見ゆるかしこさ
かにかくに思ひひそめて幾日を師の墓誌書くと心集めけり
師は神とひたに思ひし師の墓誌をわれかしこみてしるし奉る
神と仰ぎし師の墓誌を書くこの我の齡その師に及ばんとするに
何としるさば神と仰ぎし我れの師の墓誌よろしからん言葉あらなくに
我れの師の大き教をこの墓のみ前に誦して師にきこえあけむ
これのみがわがはなむけとのらしたる萬歳の聲聲大きかりき(廿五年前卒業式追憶)
萬歳の聲に皆哭きにけりはなむけと病篤き師がおらび給へば
われの師の心もはらにこごまりて草抜き給ひし姿忘らえず
おろかなる我にあれども師の徳を言ふ時心自ら競ひ立つ

海をめぐり眼下に見ゆる關門の市街よ秋の日はみなぎらふ
 眞晝日に輝らふ海峡の一ところ潮流の向き何時か變れり
 松山のなだりにはるか周防灘と思ふあたりは波光り居り
 通り來し工場裏の埃道荷馬車ならびて止まれるが見ゆ
 穂すゝきのかげにやすらひ音立てゝ山吹きすぐる風にきゝ入る
 眼覺むれば明け放ちある隣室は生徒らの食堂に今朝あつるらし
 降りしづく雨に莖立ちゆれやまぬはんくわい草の黄のあざやかさ
 療養所に行かむと決めし人の立つ朝けの空に星輝けり
 運動會すみてやすけし西南學院の講堂の上に晴るゝ秋空

教へ子

鈴木三七子

幼な顔なほ目に残れこの春をはやも業卒へていでゆくといふか
 わが前に來て立つ生徒らのほろほろと笑まふを見れば乙女さびたり
 生徒らなべて聴く育てり主任われのひそかにもてる矜りならずや
 主任われのはけしきに似す生徒らなべておほらかにしてしかも聰きを
 成田姉妹消息おこしぬ條り條り乙女さびつゝとゝのひてよき (成田姉妹)
 今宵しみゝおもひつゝをり一子らがれつすんに來しその折々を
 れつすんのひやいざなつふるはんぎんぐ一子が讀める發音のよき
 柵添ひに薔薇の濃ゆきが開きたりその紅の眼に染むばかり
 何かみつけて吾子立ちてをり芝の上に毛糸の白が陽に光るなり
 陽を浴びて芝生にうごく子のすがた白きうさぎに似てをかなしき

久住登山

松尾恒二

久住町を出でて山に登らむとせしも、天候險惡になりしため
道を法華院温泉にとり。一行教師七名生徒或十名なり。

燕子花野に生ひ咲ける谷あひを一刻にゆく路は濕れり
峠より吹きおろす風によるけつゝ身を支へたれば谷をのぞめり
面をうつ雨脚痛し山峽を吹きすぐる風にうつむき下る
びしよ濡れに濡れて着きたる湯の宿の土間は汚く水溜りたる
大きな炬燵に生徒ら集りて濡れたるものを乾すにせはしき
うす濁る山のいで湯に寛ぎて寒さにふるへし手足をのばす

中學生暴風雨の中を登はれて山上より下りたるが
やがて人事不省に陥り先生の驚愕その極に達す

すゝめらるゝ葛湯僅かになめずりて靜かにものをいひはじめたる
ランプの灯かすかにともる室にゐて何あそぶらむ女の子らは
白々と葉裏翻へし吹き荒ぶ嵐をみつゝうらさびしけれ

露天湯へ下りゆく人も見えすして傍流るゝ水荒々し

助もとむる聲聞ゆれど山中の闇はいづらともわきまへかねつ
たすけられて来りし男の修業者がしどろに語る言のあはれに
晴れ上るこの高山の空の色仰ぎてのほる朝のすがしさ

山峽を流るゝ水の沓えに沓え砂にまじらふ硫黄ひかれり
簇りて苔桃生ふる頂に萬歳さけぶ聲晴々し

乙女らを渡すに險しき假橋や雨後の水あらくたぎち流るゝ
トロツコ道に止りて聞けば二聲三聲郭公は鳴く谷の彼方に
十三曲りの險しき道を上りゆく乙女は慣れて往來するらし
空をゆく雲見てあれば船中のさざめき遠くいつか眠りぬ (屋形船)

研
究
科
集

落葉籠

水之江 滿珠枝

小きき兒の柩送りて道行けば河面に月の冷たくゆるる
暮れなづむ河面をかすめ飛ぶ蜻蛉遠山なみは紫にして
年若き母の亂れて悲しめる小きき我には慰めむすべなし
兩親に孝行せよと忘れずにつけ足す文の友は孤兒なり
ほがらかなる文にはあれど過ぎし日の友の涙を思ひて笑へず

渡邊 ふみ子

芹つみを終へし我手を洗ひけり小川のぬるみなつかしみつつ
畠にいで茄子を取り給ふおん母の老の影をば寂しく眺むる
全身に大氣を吸ひて今日も亦希望ある日を迎へしうれしさ
あゝ永久に歸らぬ君を今宵又想ひて菊の花を折りけり
乳色の朝もやこめし沖あひに浮ぶ白帆の影うすくして

濱田トシエ

風吹けばはら／＼と散る山茶花のうすべにかなし青き苔の上に
 コスモスは秋のやさしきピエローとさゝやきし人の白き横顔
 おもむろに筏は川を上りゐるて秋の陽光る白き河面
 風の音流れすぎたる部屋ぬちにひそむ秋の蚊あはれ飛び得ず
 野のはての風のそよぎにしばらくのしじまさびしく身に迫り来る

中村富美子

夕ぐれの街に物賣る乙女子の唇あせて秋の寒さよ
 足立山吹きおろす風の身にしみて庭の枯葉が音たてて鳴る
 湯の街に夕べの影のおとづれてふと襲ひ来ぬ旅の淋しさ
 淋しさを好む花かな女郎花谷間にゆらぐ一もとの花
 植込みのみどりの中に山茶花のうすべに明るき小春日の庭

中神清子

もみぢ葉のあまた散りしに池の魚の動かざりける水のつめたさ
 うす黒く暮れ行く山に我も亦淋しさのあり母いまさねば
 もみぢせる木々の繁りてこの山の美しくあり秋のよそほひ
 夕闇の海づら白く一すぢに我が船ののこす白波のあと
 大いなる山の景色をさかしまにうつせる池に我しばし居る

福田榮美子

衰へし蠅の一つが力なく障子に這ひて日ざししづかなり
 葉は落ちて枝もたわわになる柿の夕日の中に輝く朱の色
 秋たちて朝なく／＼に置く露のしけくもあるか庭の芝草
 晴れくもる人の心のさまなれや雲間の月の定まらぬ影
 軍人仇守る野原日は落ちて夕べ淋しく吹く秋の風

文法の活用など節つけて覚えし友のなつかしまるる
 その女もの云ふ度には、つきをならすが如き口ぐせをする
 毛糸など並べし縁に秋の陽の長くのびけり紅葉の散る
 野邊に来て思出の唄歌ひけりす、きのあなたに黄なる月影
 秋空に白き雲ありその影を河にうつせり晝の寂しさ

津田 朗子

三原 温子

ほのかなる月の白きに梅の實の小さきを見る若葉のかけに
 水かれし小川の土手に夏のすゝき銀に光りて長く續くも
 陽に光る午後の河原に童等のひたるを見つつ梨の皮むく
 秋の夜のひそけき内に小刀の白く光るを見詰めてるたり
 甘柿をたうべつつ行く村の子の赤きほほがよし秋風の中

妹尾 和子

微風になよやかにゆるるコスモスのうす色哀し秋深くして
 話すこと杜絶えて友と行く路に野菊の花を見出しにけり
 目をとちてまぶたのうちに浮び来る京の山なみゆるやかにして
 悲しみも恨みも消ゆる青空を眺めてあれば安き心地す
 月あかりなき山道をくだり行く心細さに聲たてゝみぬ

四
年
集

井上慶子

山幾重かさなる深き谷あひをめぐりて流るゝ宇治の清流 (宇治)

流れ清き五十鈴の川に口そゝぎ唯有難くふしおがみたり (伊勢神宮)

茂り生ふ木々のみどりのいや深き代々木の宮の朝の静けさ (明治神宮)

香の煙今もたえせぬ忠臣のおくつき訪へり高輪の地に

秋深き中禪寺湖に影うつす男體山を近くのごめり

伊木和子

ゆるやかに流るゝ雲の眞白きに心和みて一人ふみ讀む

山みねのけはしき崖に咲く花の姿もうれしみやまなでしこ

大いなる無花果の葉のしけみより蝶とび出でぬ眞晝のしづけさ

白芙蓉咲きそめにけりこの朝すゝきなどそへかめにさしたり

さゝやけき川の流れに止りたる水車一つ淋しくかゝれり

水清き流に友と話しつゝ洗濯をしぬ山の旅にて (久住山)

市川美佐子

一面に芝生ひ茂る若草山入口あびつゝ鹿は遊べり
澄みわたる御裳裾川の流にて腰かゝめつゝ我が手清めぬ
五十鈴川清き流に手を清め静かに仰ぐ伊勢の大宮
富士山の白き高嶺を車窓より喜びに満ち仰ぎ見にけり

岩松善子

柿の木の枯葉かさくゝと秋風に舞ひながらおちぬ西日をうけて
蒼白き聖チエチリアの横顔を思はず凝視むその清らかさ
思ひ出の古き砂津の校舎よりうつりて最早や一年過ぎぬ
街燈の影淡くうつるカーテンをもてあそびつゝ物思ひする
蟬の聲涼しくなきぬ夕方の打水したる庭の青木に

磯邊房枝

桃山の高ききざはしかぞへつつ御陵仰ぎて登り行くかな
緑濃き芝生ひしける若草の山のなだりに語らふ人々
秋風に眞裸となりし白樺の木の間に見ゆる紅葉せる山 (日光)
猿澤の池畔に立ちて眼をとぢぬ南圓堂の鐘のひびきに
中禪寺湖畔をめぐる山々の唯美はしきにみとれて立ちぬ

一丸葉子

草の上に霜おく今朝の寒さかなはきだす息の白くみえぬる
旅先の友のおたよりなつかしく室につどひてよみふけりたり
友達の歸りくる日のまち遠くすすかけの下に友と噂す
青白く空にまたたく星一つ桐の木の葉の間よりみゆ
はるかなる足立の嶺に霧かかりしだいに姿かくしゆくなり

京言葉まねる聲音も面白く笑ひさざめく宿の室ぬち
 ほのほのと姫路の空は明けそめて朧に浮ぶ白鷺城は
 春日野の社に向ふ參道に小鹿の群のうちつれて寄る
 奈良公園に日はうららかに照り渡り煎餅持つ手に鹿の寄り來る
 柳散る猿澤の池に影落す五重の塔の清き姿よ

市橋 一枝

池尻 益代

夕映に小波光る瀬戸の海我等を乗せし汽車は走れり (車中にて)
 腹立ちし心を笑にまぎらせど何時とはなしに涙浮びつ
 長閑なる秋のひざしを背にうけて角なき牡鹿るねむりをせり (奈良にて)
 妹に旅行土産を買ひ求めひとりほゝゑむ京の夜更に
 賀茂川の水にさらせし友禪模様秋吹く風にひらめいてをり

石橋 薫

猿澤のほとりに遊ぶ鹿の群よりそひて來ておじぎするなり
 底見ゆる清き流れの五十鈴川赤き小魚の群をなし居る
 白樺のつゞける中を自動車は我等をのせて通り過ぎたり (日光にて)
 中禪寺湖畔に立てば青く澄む水の面には小波立てり
 すめらぎのおはします宮と思ふ時尊きあまり頭下れり

井上 ミツ

あへぎつゝ山の頂極めたり腹の底より萬歳を叫ぶ (九重登山)
 胸しむるリュックサックの紐に堪へかねて泣きつゝ心に母の名を呼ぶ
 さゝ波に月はさやかにてりわたり遙か彼方に苦舟の浮く
 名にし負ふ白鷺城はあれならむ暗きが中におほろにも見ゆ
 眠られぬ一夜明かして友達と夜汽車のつらさ語り合ひたり

夕立の晴れて涼しき庭の邊の松の葉露は輝きて居り

岩崎博子

しめりたるあしたの庭に帚とる此の一時の樂しかりけり

青草をふみ分け行けばつゝましく一つ開けり桔梗の花の

しめやかに降りし秋雨に大阪の未だ夜明けの灯は映りをり

故郷を立ちて今宵は四日なり寒きホームに汽車を待ち居り (伊勢立つ晩)

岩松フミ

御手洗の清水我が手につけし時心も身を自から澄む (明治神宮)

渡月橋下に流るゝ清き水嵐の山にはえて見ゆるも

古の都の跡ぞしのばれつ柳しけれる猿澤の池

名にし負ふ富士の高嶺の美しきはるかなれども尊さ覺ゆ (汽車中にて)

秋の空くまなく晴れて遠野行く馬のひづめの音きこゆなり

稻田政子

接戦の後にかゝけし日章旗君が代ひゞく異國の空に

新しき網をかゝへて弟はトンボの群を追ひかけにけり

數々にそろへし品を手に取りて入れるも嬉しリユクサクの中

がんぜきの目立て正しき御庭にひたすら拜す京都の御所は

あこがれの富士も夜汽車のかなしさよかけ繪の如く窓にうつれり

石崎無津美

かしこくも御所拜觀をゆるされて箒目正しき御庭ふみ行く (京都御所)

衣掛けの柳ときゝてそのかみの美しき人思ひうかべつ (猿澤池)

遊びる鹿のむれなどながめつゝ日のうらゝけき芝山をゆく (嫩草山)

東京の銀座の柳はこれなりと車掌の聲にみななのびあがる

あまりにも大きながめにも言はむこともわすれて我は見入りぬ (華嚴瀧)

井上スズカ

あれもほしこれもいゝわと友つどひ店の前にて小腰かゝむる (京都にて)

よく見よと友にさそはれ汽車の窓ゆ富士の姿をおどろき見はる (日光行車中にて)

猿澤の池のほとりにおちつきてふと思ひいつ古の奈良

木の蔭を左右に見つゝ下り行く前にひろがる馬酔木アサビの木立 (奈良にて)驛に着き整列すれば目の前にビルディング街ビルヂング並び立ちたり (東京驛にて)

石井清榮子

日の本の帝のいます宮城を目のあたり拜し畏さ身にしむ

五重塔遠き昔を物語り秋空高くそびえて立てり

兄上はこの頃買ひしギターをばなれぬ手つきで一心にひく

降續く雨上るらし空の雲ふわり／＼かなたへ走る

今日はどれ明日はどれかと朝顔の花の開くを見るは嬉しき

井上安子

猿澤の池畔に立ちて朝靄の中にかべる塔をば仰ぐ

猿澤の清き水面に楊柳の枝はしだりて夜のしづけき

紅の紅葉のひまに白樺の白き小幹のちらほらと見ゆ

船は今須磨か明石か燈臺の明き光のまたゝいて見ゆ

打上ぐる花火の音に賑はへる今宵限りの川祭りかな

伊藤文子

窓の邊にからむ朝顔の青き葉に風のあるらしさゆれて見ゆる

くねそむる庭邊に立てば田面より葉すれの音のわびしく聞ゆ

西日さす縁に立ちいで黄昏の港の様を現にぞ見る

よせてくる波に消えゆく砂山を小さき手にてさゝゆる子等は

獨居はさびしきものかたま／＼に火鉢の灰に目を落しけり

甲板で夜風受けつ、眺め見る瀬戸内海にともるともし火
野良犬をいくども捨ててに行くけれど我より先に歸るいぢらしさ
猿澤の池畔に立てば水面に高く聳ゆる五重の塔うつる
面會人と楽しく友は語りをり我は寂しく窓にもたれるる
庭隅に叢がり立てる桃の木は今年始めて實を結びたり

池田ノブ子

飯田光子

静かなる秋の一日暮れゆきて入口しづかに瀬戸の海てらす
青丹よし奈良の都を歩きつ、心ははるか上古にかよへり
久し振り逢ひたる友と木影にて昔を語る懐しさかな
御手洗の清水にそゝぎ清むれば心静かになるを覺ゆる
をさなきに住みし處を汽車走る須磨明石の海見るはなつかし

原ツメ子

室内のてすりによりて淋しさに流る、川の小波を見る
猿澤の青き池水に影うつす枝垂柳の姿優しき
池の面に影を映せる灯火の色美はしき猿澤の池
歩み行く路の傍へに名も知らぬ花咲きたるに心ひかれつ
薬屋根の片光りするわびしさに眼に浮び来る母の面影

林正子

清らなる五十鈴の流れに身を清め我つゝしみて社前にぬかつく
さく／＼と玉砂利の音もおごそかにふりし社の森にひびきつ
學び舎の窓にもたれて眺めつゝ登山の友に思ひを馳せつ
病みませる母の枕邊にそと行けば薬の香のみ部屋に漂ふ
涼み臺子供多勢集ひたり夜更くるも知らで歌ひ遊びぬ

長谷川千里

山狭の夕日輝く空たかく鴉二三羽飛去りにけり
 笠山に登りて見ればかすかなる地平線上に舟の現はる（萩にて）
 白雲の飛べる如く流れ落つる華嚴の瀧をさむざむとみゆ
 そのかみの奈良の都の名残をばとゞめて青し猿澤の池
 だう／＼と打寄せ返す磯の波岩にあたりて花と碎くる

濱武英子

朝なぎの海をすべりて行く船に泣いて別れし叔母をば思ふ
 物憂けにころびていねし老犬も深く息づく今日の暑さに
 しみ／＼と叔母を戀しく思ひたりたより少き今とはなりて
 ふとさめて寒きに衿をかきあはせ車中より見る中國の月
 誰やらん廊下をあるく足音を淋しくきゝつべツトにありて（萬世ホテル）

濱田トシエ

暮れて行く野の邊に立ちて見わたせば早灯またゝく若松のあたり
 ひるすぎであらしのあとの庭みればコスモスの莖たふれ伏したる
 静まれる木立の境内曲り行けば白木の宮居いとも畏し（皇太神宮）
 御手洗の五十鈴の川の若鮎の泳けるが見ゆ水の間間に
 垂乳根の母にまるらすたより書く東大寺の鐘の響く夕ぐれ

丹生清子

汽車は早神戸をすぎて君住まふ京都の町へ近づきにけり
 名にしおふ銀座の柳もうら枯れて都の秋はひたにわびしき
 朝霧はまたくはれたり猿澤の池の柳のさやかにもみゆ
 この山は何てふ名かも秋半ば早雪いたゞきて男體と並ぶ（中禪寺湖畔）
 新京極大丸祇園三條と京都の夜はひたに嬉しき（京の友に案内していたゞき町を歩く）

錦戸まゆみ

明專に一休みしてびしょくゝにぬれて馬をば手入するなり (遠乗會)

青空はあくまで澄みてのどかなり嫩草山に鹿はたはむれ (奈良)

眞青に澄み渡りたる湖を數隻のボート軽くはしれり (中禪寺湖)

聖帝の遺徳を偲ぶ繪畫館けだかきあまりしばし聲のむ

十時よりオリンピックの實況を聞くも日課の一つなりけり

丹村光恵

旅にあれば母のなつかしき此の夕ひとり窓邊に空をながめつ

知恩院甚五郎のわすれ傘さがせどみえぬ高き軒端に

清らなる五十鈴の流に身を清め神の御前に我はぬかつく

眞白き雪を頭にいたゞきて秋日にはゆる富士の山かな

田の中の細き畦道とほくゝとおのが足音きながら行く

入學美代子

姫路驛すぐれば暗き夜の闇に白く浮びぬ白鷺城は

餌を持ちて芝生の上をかけまわり奈良の都に鹿とたはむる

眞夜中の富士は眞黒く目前にそびえたち見ゆ汽車の窓にて

高層の眞白きビルは並びたち自動車の群のおびたゞしきかな

奥山に清水もとめて音のする方に向ひて道わけゆけり

堀岡清子

月山のつゞち多き龜石坊一人立ちるて昔しのべり (英彦山)

靜かなる海の汀に女童の遊べる聲の流れきこゆる (西戸崎)

朝まだき庭に立てば懸崖のけだかき香心にしみぬ

頂の二つある山をふり仰き笑ひさゞめき友と歩めり

車窓より見ゆる芋畑あまたあり幼き時の遠足を思ふ

都甲千代子

人里に離れて淋しき驛の柵に群咲くコスモスに心ひかれし
 果しなき武藏野の原に黙々と星の如くに散らばるたうしやく
 夕靄の立ちこめたれば武藏野は薄墨色に暮れ行きにけり
 名残り惜しき運動會も終り果て人なきグラウンドに夕日の紅き
 久々に訪ひ給ひし我が友の顔を見るだに恥しく嬉し（夏休みに）

登本壽壽子

噴水の雨かとまどふ旅の宿友と寝ねつゝ語る京都を
 湯上りに浴衣の糊のこそばゆく白き夕顔をたちて見にけり
 父上の造りたまへる蔓棚の荔枝の葉の面に露かがやけり
 あはれにも庭隅に咲くツマグロの紅き花瓣は雨に打たれて
 赤黒き肌を照され嬉しけに遊びるるなり鮎を採る子等

富田咲子

夕暮の瀬戸の入江の鳥かけにすなとりの舟一つたゞよふ
 はだ寒き柳の幹にもたれつゝ昔をしのぶ猿澤の池
 いねられぬ夜汽車の窓にすり寄れば遙かの闇に白鷺城見ゆ
 はだにしむ冷たき風におのゝきつゝ一人見つめぬすめる水面を（中禪寺湖）
 野を渡る風に親しみあふのけば夜空に淋し赤きアンタレス

富永愛子

我を見て走りよりけり愛らしき幼き子等の頬はかゞやく
 月さえし縁側にたち歌をよむ今宵のさむさ身にしみにける
 ふけし夜の風呂にひたりてしみじみと今日の出来事思ひぬるかな
 なだらかな砂丘に立てる我が頬にやさしくふれて潮風のゆく（西戸崎遠足）
 勇みたち汽車にのりこむ友人を唇かみて送る悲しさ（修學旅行の友を送りて）

豊田 和代

衣濯ぐ鹽の水に咲きそめし朝顔清くうつりてゆらぐ
 簾ごしに庭を見やれば青草のなびきて涼し夏の夕暮
 故郷は夏祭ぞと思ひつゝ今日の暦を小指にはがす
 アスファルト道を、輕けに歩み行くネオンサインの美しき銀座

禿河 富美枝

庭すみに名しれぬ草のかよはくも花をひらきてゆらめきてをり
 ひつそりとねしづまりたるま夜中にあく夢に目ざめふとんかぶりぬ
 金魚賣りのこゑ涼しきに出て見れば汗だくのかほに街をふれゆく
 水蓮のはかけをぬひて金魚らのいと涼しけにおよぎをるなり
 たんほ路を歩めば吹きくる涼風に早くも秋のおとづれを知る

千々和 ミツ子

人ごみにもまれて歩く足おそし夏越祭の夜のにぎはひ
 俄雨一しきりして晴れ上り夕日明るく縁にさしたり
 雨だれの音も淋しきこの宵の厨の側にこほろぎの鳴く
 今度こそ今度こそはと待ちにける京のまひこのやつと来れり
 朱色に染まりし紅葉手に取りて唯わけなくもかざし見るかな

太田 政子

ベルリンのメインマストにかゝやける我が日の本の旗ぞうれしき
(新聞の寫眞を見て)
 選手等の活躍のさま聞き居れば知らずノゝに涙にじみぬ
(オリムピック實況放送を聞く)
 見渡せば眼下一面廣野原草千里には牛の遊べり (阿蘇登山)
 歌劇観て歸る乙女は頬赤め武庫川べりを語りつゝ行く
 たそがれの色もさびしく秋深し運動會のかたづけの後

大路ひさ子

人は去り月影淡き松原に小舟唯一つこぎ行く静けさ
 三隈川夏の朝とく糸垂れて鮎釣る人の影一つ見ゆ
 車より驛名を見むと目をやればコスモスの花風にゆらけり
 十五夜のさやけき月に踊るらし太鼓の音のかすかに聞ゆ
 夕立の雨雲はけしく行きかひて風なまぬるく葉すれ騒がし

大宮道代

苔むせる大杉木立の参道に神代しのばす鶏の居り
 いねもせず我が枕邊にみとりする祖母の姿いとやつれ居り
 茄子瓜の畠に立ちて見渡せば雲行けはしき西の空かな
 たうなすの我が手料理に舌うちて楽しく語る我が家の夕
 盆踊りの聲は遠くに聞ゆるを病みたる我は床に聞きつゝ

奥野峯子

静かなる波間を越えて聞え来る調べも清きハーモニカの音
 まちにまち思ひこがれし旅行をば明日に控へて胸はときめく
 新しきプールに泳ぐ少女等の顔も輝く眞夏の光
 我母と垣根に植ゑたる朝顔が夏の光に伸ぶる美しさ
 秋風のそよ吹く度に朝顔の香も甘く匂ひ来るかな

奥久子

古のいくさの様を偲びつゝ赤き擬寶珠の宇治橋を渡る
 線香の煙こめたる墓石の一つ／＼に思ひ深けれ (泉岳寺)
 暫くはテニスも乗馬もとめられし父の枕邊に馬像ありけり
 藤村の夜明け前など取出して父の枕邊にそつと置きたり
 スタンドのともし火ごしに病床の父を見やれば髭はのびたり

大西智恵子

友さりて取亂したる我が部屋のかたづけ終へし後の空しさ
 聳え立つ五重塔も黒ずみて靜かに更くる猿澤の池
 公園のあちこちに鹿の集ひるて馬酔木の木々は日影うつせり (奈良)
 中禪寺湖畔に立ちて仰ぎ見る男體の山靜かなるかも
 五十鈴川の清き流れに手を洗ひ靜かに行きぬ玉砂利路を

小幡道子

嫩草山人出の多き草むらに鹿も交りて遊びをりけり (奈良)
 靜かなる秋の夕焼眺めつゝ思ひ浮ぶる亡き父のこと
 青蚊帳の中には入りて妹と笑ひさゝめく夏は來たりぬ
 朝霞の白く残りし明け方を妹と二人で野の道を行く
 風の音さやかに響く野邊の路歌をうたひて我は歸るも

岡本良子

さやかにもミシンの音のみ聞えるて校庭の晝靜かなりけり
 縫ひ終へし後の心のすがしさを友に語りて喜びにけり
 簾ごし吹き來る風のすがしさよ夕立模様とラヂオは告ぐる
 休み日も終りを告げて來し方を振顧みる今日の我かも
 鳴く鹿の聲どこ迄も澄渡る奈良の都の秋の夕暮

小川澄子

横ぶりののはけしき中に立ち居れば背すじ冷たく雨垂るゝなり (神戸)
 水蓮の葉蔭にひそむ緋鯉たち尾びれは絶えず動かして居り (金關寺)
 船の吐く煙は黒く垂れ下り風なき海にしばしば消えぬ (船中にて)
 坂道を登りて蔭に息ひ居れば背すじを通る風の涼しき
 入り船はゆるく岸壁に近づきて手を振る友の甲板に見ゆ

歩み居る春日の鹿の人馴れて近くかけよる可愛ゆき姿

猿澤の池畔に立ちて思ふかな古榮えし奈良の都を

久々の友の便りのなつかしく山の便りをくりかへし讀む

病室の窓邊に來りて鳴く虫のその聲さびしもしづもる夜半に

猿澤の水面を見つゝ古の奈良の都の歴史をたどる

岡住 アキエ

大和田 節子

すこやかに行き来して歸れと母上は旅立つ我に優しくのたまふ

ぬかづきてはるかにいますすめらみ天皇の御榮え祈る心清らに (二重橋)

水青き池の畔に夕暮の鐘の音聞きて故郷を戀ふ (猿澤池)

美しき人形買ひて我が友は病の姉におくらむと言ふ (京都)

離れ行く自動車の窓より眺めたる湖の上白く光れり (中禪寺湖)

大津賀 マス子

尾形 美波

今日も又暑き日ならんあしたより蟬の聲する庭の木の上

朝日射す明るき木の間に蟬止まり聲かしましく泣續け居る

何時の間か雨降り出でゝつまぐろの花ほの暗し夕暮の庭

色々のネオンサインに飾られし夜の銀座の町美しき

車窓より遙か彼方におほろけに霞みて見ゆる富士の高嶺は

川祭り今始まるか花火の音夜空に高くひゞきわたりぬ

月照らぬ淋しき夜の丘の上宵待草の咲きてゐるかも

唯獨り部屋にこもりてなんとなく思ひ出さるる過ぎし日の事

土の上にわけなく文字を書きつらね我が淋しさをまぎらしてゐぬ

十五夜の明るくてらす夏の夜に母と二人ゐるて四方の話す

見はるかす緑の野邊の空高くちぎれ／＼て白雲の飛ぶ
 まだ間あるブラットフォームに降り立ちて叔父を迎ふる心騒ぐも
 青草にひとりまろびて行く雲を見てゐる心静なりけり
 夕立に難あまたかけこみてひしめきあへり土間の狭きに
 俄雨晴れてすがしも街道の並木の濡葉入日に光れり

和田ウメ子

和田富貴恵

忙しき仕事をよそに吾子の爲無事と見送る姿とほとき
 清涼殿のお室の中を拜觀し思ひ新に古人を忍ぶ
 車中よりかすかに望みぬおごそかに目にてらされし富士の頂
 加茂川の紫色の水の面に風にたなびく友禪のうつる
 名にしおふ猿澤池を前にして昔の奈良を友と語りぬ

和田秀子

久々に嫁ぎし姉の歸り來て笑ひざわめく春の宵かな
 久々に嫁ぎし姉と亡き父の墓前にぬかつく日曜の朝
 そよ風の吹き入る窓邊春の夜の留守居佗しく書讀みにけり
 病院の藤の青葉は茂りゆけど兄の病はいまだいえざり
 稻の穂の健やかに伸びし田の上をそよ風吹けり新秋の朝

和田佳枝

旅行より歸りきたりて嬉しさに旅路の様を母にするかも
 初めての旅の支度に時すぎて明日の豫習は怠りにけり
 秋の夜の長きを一人物思ふ今宵は淋しコホロギの鳴く
 草むらに蟲の鳴き聲聞えきてふけゆく秋の夜の寂しさ
 郵便となけこむ物を手に取れば戀しき母の便りなりけり

愛らしき京都言葉を使ひつゝ、手を引かれゆく幼きをの子
参道の木の間木の間に佇まふ鹿も優しき春日の社

我はいま大き御佛をろがみて聖武の御代を忍びまつるも

盛んなる供養法會のお儀式も思へば古き奈良朝の事 (大佛殿)

此の御堂聖武の御代の僧正の讀經の聲のこもりるらん (大佛殿)

河村 壽子

その昔牛車にのりてすぎし人そぞろしのびぬ四條の大橋 (京都)

公園の芝の縁に色はえて朱塗りの柱見え隠れする (奈良)

畏くもすめらみかどのおはします彼方の森やうらゝ日のさす (宮城)

何驛か名は知らねどもコスモスのさきみだれたるホームのありき

お互にはけましつゝ、もきはめえて友の眼にも涙のありき (九住山頂)

加生 操

眞暗き丹那トンネル汽車は出で熱海の海に朝日輝く

玉川に今日の一日を楽しめり西日は映ゆる河原の石に

打水して父を待たんとたゝすめば涼しき風は髪をなでゆく

明日よりは待ちにし旅と若き日の父の旅日誌ひとときてみぬ

夢の國の城とも見ゆれ白鷺城小暗き中に浮かび見えたり

鐘ヶ江 幸子

ひそかなる友のねいきを感じつゝ、京のたよりを書きつゝりゆく

幾度か橋を渡りて友人とつれだちて行く京の夜の町

初旅をきづかふ母を思ひつゝ、夜汽車に結ぶ秋の夜の夢

夕ぐるゝ猿澤池にたゝすみて水面を走る白雲を見る

雨上りそよ風吹きてつまぐろの紅き花瓣は庭面を染めぬ

トランクに着物宿題つめこみて時の経過をいらいらと待つ (佐賀に歸る前日)

懐かしさ嬉しさにみつる身を乗せて汽車は佐賀へと青田を走る

夢の間に汽車は小倉に着きしかど今母達は何していまさむ (母に別れて)

怠くれば母に叱られ意地を出し休みの課題みな終へにけり

母の文短かけれども親心身にしみゆきて涙流るる

川本 歳 恵

懐しき門司の港を後にして我行かむとす父母います地に

はるかなる對島を左に眺めつゝ波分け行きて進む我が船 (うらる丸船中)

乗物に弱き我をば氣づかひし友の情はうれしかりけり

病床に訪れし友の優しさに病もいえし心地しにけり

何となき友の言葉の氣になりて今宵の我の心淋しき

兼尾 美 智 子

夕立の通り過ぎたる池の面のはすのうてなに白露やどる

落葉ふむ音のみ高し夕暮の色せまりたる秋の山道

島山は遠く霞につゝまれておほろ月夜は更け行きにけり

神さびし香椎の宮の綾杉に昔の様ぞ偲ばるるなり

星空に雁の聲して一入に淋しさ思はず秋の夜の窓

川 上 綾 子

玉砂利を一足ごとにふみしめて進むもかしこき伊勢の大廟

楽しみの修學旅行の第一夜川のせゝらぎ聞きて眠りぬ (京都)

丸窓の外をのぞけば燈臺の青き光は淡くまたたく (船中)

幾百としれぬ燈籠のその中に春日の鹿はねそべりるぬ

河どての蘆の葉そよぐ夕風にのりきたりたる百合の香よ

懐しき友のたよりを繰返し我は夢見ぬ奈良の都を
 東路に旅する友の恙なく歸り來ん日を我は祈りぬ
 庭隅に置きて久しき芋俵俵のまゝに芽をふきにけり
 夜に入りて船の出入りもとだえたり岩かむ波の音いと高し
 秋更けて母屋の庭の蒔柿は梢に高く一つ残れり

吉田千鶴子

うしろにて歌ふ歌聲もの悲し夕暗せまる汽車の中にて

吉田静子

一ノ宮のプラットホーム一ぱいに咲き亂れたるコスモスの花

綠草生ふる野原にたゝすみてすりよる鹿にたはむるゝかな (奈良)

自動車をつらねて登る二荒山もみぢせる木々手をさし延ぶる

大谷川岩にくだけて流れ行く上にかゝれる朱の神橋 (日光にて)

吉田稔枝

居残れる親友の面に涙あり我慰め得ず胸はつまりて (プラットホームにて)

稲刈りのすみし田の面に夕日さし京の田舎の秋は深しも

オリンピック村社選手の頑張りに旗こそ上らね涙こぼれたり

花火會子供心に立ちかへり思はず甘へ父の手さぐる

たらちねの父の心の有難さつながれし手にあつき覚えぬ

吉原道子

夕立にぬれし馬簾は夕ぐれにともしび受けて清くかゞやく

旅疲れしてくる頃になつかしき我家を思ふ淋しくなりて

我がひざに伏して眠れる友の顔淋しく眺む眠れぬ夜汽車に

五十鈴川清き流れに古への人の歌ひし歌の偲ばる

ほうき目の清く見えたる砂利ふみて尊く畏き御所を拜しぬ

嵐山まだ紅葉せぬ葉がくれを過ぎ行く人の影見えにけり
 中禪寺湖畔の木々の紅葉して小枝に小鳥とびまはりをり
 ほのゝと夜は明けゆきて汽車の窓にかすかに見ゆる富士の山かな
 夕日さす嫩草山のふもとにて我は小鹿とたはむれにけり
 しらくくと朝明けそめし甲板に立ちてながむる濃緑の海

吉原満壽子

夏日さす座敷へ蝶の舞ひ來り壁に止りて動かぬ眞晝
 叱られてそと仰ぎ見る大空にすゞしく星はまたゝいて居り
 幼くて別れし友を偲ぶかな雨降る夜の遠き想ひ出
 雨晴れの朝すがくし背のびして何かうれしく仰ぐ大空
 洗濯の腰のばしつゝふり仰ぐみどりの空に心安けし

田仲芳子

車窓より見し富士の嶺は空高く浮び上りて尊かりけり
 大いなる木の下蔭にうづくまる老いたる鹿のまみ優しかり
 瀬戸の海夕風風ぎて小豆島すぐまぢかなり帆影過ぎゆく
 青葉洩る日影あかるき午下り母待ち佗びて手習ひするも
 みはるかす幾山脈に青葉萌え野飼ひの牛の散らばりてあり
 (久住高原)

武田千鶴子

最後までまじめに學べと先生の御教へ深く我身にこたへぬ
 大いなるリュックサックを背に負ひて旅行する日のまぢどほしかり
 タやけに紅くそまれる内海に浮べる白帆金色に見ゆる
 朝風に吹かれて上る甲板よりめかりの社懐かしく見る
 天皇の御徳しのびまつりつゝ社の森をわが通りけり
 (明治神宮)

新しき本の匂ひのなんとなく戀しくなりぬ秋の風吹く
 晴れながら日ざしの弱き庭土に枯木かすかに影ひきて居り
 久々にまみえし友と語らひて昔變らぬくせなつかしき
 しらじらと冷たき友の横顔に話さむとして口つぐみたり
 潮風の吹き上げて来る丘の家は簾はづして夕餉するなり

竹下 清子

竹下 静江

友達の旅の便りを見る度に淋しき思ひに涙湧き出づ
 旅先の文を話題に語り合ふ學舎の窓に秋の日はさす
 木枯に木々の病葉散り果て、柿の實赤く夕日に輝く
 小夜ふけて行きかふ人の音も絶え稻こぎの音のさえて聞ゆる
 つる／＼と滑る足もとふみしめてあな恐ろしと友にすがりつ

(久住登山)

田澤 富美子

朝まだき蟬なく聲の聞えきて今日の暑さのそゞろ思はる
 水清きいけすの面を眺むれば群なす鯛の遊び居るなり (芥屋に行く)
 喜びて旅立つ友を送り来て獨り淋しく家路をたどる
 黄に染みし落葉拾ひて焚火せり暮るゝに早き秋の夕暮

武谷 安代

豪雨降るひと日を部屋に籠らへばやさしき母を思ひでにけり
 幾重にもつゝみこめたる霧晴れて遠くに見ゆる山の小屋かな
 山の雨降りまさりつゝ夜はふけてすや／＼ねむる友達の顔
 高原の雨を含みて吹く風に久住日ざして登りゆくかな
 床の中に疲れし身體を横たへてたのしき我が家の事を思へり

(五首久住登山)

今日着きし友の便りの短きが物足らざりきくり返し讀む
 いくより迷ひ來にけむ鈴蟲は据風呂のかけにリン／＼と鳴く
 夜もすがら鳴き明かしたる鈴蟲の聲や、ほそる明け近き頃
 すめらぎの命かしこみいさみたつ父は吾のみの父にはあらじ
 物書きて小夜更けにけり灯火に背をむけてゐる母の寢姿

田島京

田中スミ

仄暗きランプの灯影揺れ動き久住の山の夜は更け行く
 山路に白く光れる朝露に濡れつゝ險しき山路たどりぬ
 我等みな山をきはめし喜びの萬歳の聲谷間に響く
 屋形船浮かべる川の水の面にうつるかがり火見つゝ語らふ
 ねむられぬまゝにデッキに立ち出でて父母思ふかな晩秋の宵

立石雪子

稻の面を吹き通ひ來る涼風をうけつつ行きぬ田中のこみち
 叱られて窓邊にもたれ涙しぬ亡き母上の懐しくして
 憧れの富士のみ山も夜汽車にて遙かに黒き影をのぞめり
 老い先の短き父にやさしくと言はれし姉の目もうるみ居り
 次々に運び來るを聲高にせりあけてゐる魚市の朝

高木千枝

よき事の訪づるゝとかうどんけの花ほころびぬ秋の我家に
 影うつす猿澤池のほとりにてそゞろ思へり千年の昔を
 一人居てをのが行手の明かるさを思ひては謝す人の教へに
 垣根ごし姿見えねど六段の調流れぬ夏の夕暮
 初秋かと思ひて仰ぐ天の川牽牛織女のまたゝきてをり

田中美穂子

徒らにもらひてさし、薔薇の芽の今は友の形見ともなる (友を送りて)

ハンカチで面をおほひて泣き給ふ白きが浮ぶ夜の寢醒に (友を送りて)

たゞ一つ夕顔の花の咲きにけり雨の垣根の青き葉影に

枕邊のかそけき音に目醒むれば母は藥を盛りてたまひぬ

朝まだき五重の塔は神さびて昔偲ばす老松の影 (奈良)

高橋早苗

捕蟲網手に持ち下げたる學生のあまた目につくこの眞晝かな

雨降りて人の往來の絶えにけり川の祭りもむなしく過ぎぬ

打上ぐる花火の音に見上ぐれば空を走れる煙の一すぢ

庭に立つ笹はさやかに音たつる七夕まつりの宵の星空

手入せぬに名もなき草の生ひしける中に美しき花も咲きたり

高鶴信子

口數のすくなき父の一言に我しみじみと泣かされにけり

いろいろのつくり顔して幼子を笑はせむとして遂に泣かせたり

ゆがへりにてる月影に白々と照しみるかなわが素足をば

玄海の灘の濱邊の老松にかゝりてさみしき宵の月かな

口軽くしやべりし後のさみしさよ我が愚かさをしみじみ思ひて

田中利恵

流れ行く小川の水は滑かに岸邊の姿映しつゝ行く

砂山をざくりノと踏行けば一足事に砂は崩るゝ

窓に寄り遠くに見ゆる山々を友等調ぶる聲賑はしさ

松原の木蔭によりて輪を造りいそぐ語る楽しき遠足

四年間一緒に學びし友達と別るる悲しさ思ひみにけり

坪井富士恵

廣らなる若草山の芝の上に遊びたはむる、小鹿のむれかも
 清らなるみたらし川の流れて我手清めて心安けし
 窓の邊に寄りそひ見れば明方の富士の姿の氣高かりけり
 縁なす松のみどりの變りなく御濠の水に影をうつせり (宮城)
 白樺の林の中を過ぎ行けばかたへに青く中禪寺湖見ゆ

坪根博子

ゆく秋の雲は浮べり山峽の清き水面に影をうつして
 戸を繰れば秋の庭面にたれこめし曉霧の強く身にしむ
 底もなき大海原より湧出で、岸に打寄する磯の大浪
 秋日さす宇治の河原に下り立ちて過ぎし昔をしのびぬるかな
 そよ／＼と山の脊を吹く秋風にすゝきの穂波靜なりけり

土谷貞子

瀬戸の海黒きとばりに覆はれて三日月ばかり淡く光れり
 ひたはしる車窓に近く又遠く名に負ふ茶畑の美しきかな (宇治)
 内宮の橋を渡りて玉砂利の清きひゞきの身にしみわたる
 古き歌思ひ出しつゝ、我も又清き流れに身を清めけり (五十鈴川)
 友どちの指さす彼方ほんのりと富士の雄姿は表はれにけり

塚本時子

深々と霧たちこむる朝まだき落葉焚く煙は淡く立ちたり
 荒れはてし庭に咲きたる白菊はほのかに紅をさしてありけり
 手入してつくりし弟の朝顔は今朝は蕾を二つつけたり
 長々と白くかはける一筋道を荷馬車一臺遠ざかり行く
 朝明けて吹く風清き川土手を草分け行けばコホロギのなく

秋雨にしとゞ濡れたる大内の御苑ひろらに松の色濃き（京都御所）

ほの暗き池の水面に影ひたす垂枝柳に夜霧立ちこむ（猿澤の池）

草青き山のなだりに春日野の角なきを鹿一つ又二つ（嫩草山）

あきらかにそれと言はねど彼の人の瞳にそれと我感じけり

何となく人懐しきこの夕べ都の兄に長き文書く

中村茂登子

濁流に押流されし家あとに電柱の頭僅かにのぞく

飛行場も水に浸され川中に植樹ばかりが浮出てるも

川の中の洲にたてられしボート屋の屋根近くまで水は増したり（三首京坡漢江の増水を見に行つて詠む）

そのかみの榮華を誇るものゝごと池の水蓮の色美しき（京城徳壽宮）

敷きつめし玉砂利の上をふみしめて神に詣づる心清らか（皇太神宮）

中川千萬子

杉木立眞直に立ちて汝が心直くあれよと教ふる如し（皇太神宮）

煎餅を與へてやればさを鹿の頭を下ぐるあいらしきかな（奈良）

緑なす嫩草山を歩みるる人影の見ゆあちらこちらに（嫩草山）

結跏して空を見守る御佛の大きに驚く見る人ごとに（奈良の大佛）

あかつきの暗きみ空に白く浮ぶ富士の姿ぞ尊かりけり（車窓より眺めた富士）

中島澄子

昆蟲を採る弟の頬は兩腕は夏の入口をうけて光れる

朝露にしとゞ濡れたる山萩は我の素足につめたかりけり

秋深き頃とはなりぬ竹籬の黄菊日毎に色づきて見ゆ

雨止みて池の水面は静かにて尾ひれ豊かに緋鯉泳けり

留守を守り書読みをれば静かにて十燭光の光り淋しも

夏の日はまだ山の端に残れるに夕顔の花咲き初めにけり
 月冴ゆる縁側に出て琴の音に耳かたむくる夏の宵かな
 一面の芝生は夕日に輝きてなほ人去らぬ嫩草山かな
 人馴れし鹿のかわゆく寄り来るを恐れて逃ぐる子等も目につく
 五十鈴川の清き流に手を清めみなり正して拜する畏さ

長畑 弘子

中川 貞子

更けて行く秋の夜淋し猿澤の夜半の鐘の仄かに響く
 砂敷きて塵一つなき境内の神々しさに心打たる、
 樂しみは故郷へ土産忙しく買ひ求め行く秋の夜の町
 山頂を極めた事を土産にと我が家に向ふ歸途の樂しさ (久住山)
 凱旋の歩調も高しくさ人健氣な様に涙こほる、

長畑 百合子

猿澤のまだあけきらぬ池の面の波は靜かにさゆらぎてをり
 嵐山渡月橋を前にして友と二人でひるけしにけり
 嫩草山の麓の芝生に寝轉びて奈良の秋空仰ぎ見ぬ友と
 夏の日を背に受けながら短歌讀みぬ紫川の川邊に立ちて
 青草の河原に我は寝轉びて仰ぎし空は日本晴なり

直江 勉 榮

瀬戸の海赤き夕日に輝きてけはしき巖も繪の如く見ゆ
 香煙の絶えまなければ碑文いしごまの眞黒になりて明らかならず
 過ぎし日の震災記念の繪畫見て幾萬の人の冥福祈る
 垣間見る隣家の庭の白ダリヤ煤をかむりて薄黒くなりぬ
 はるかなる水平線の彼方にて白き帆影のかすかに見ゆる

(泉岳寺)

中村良子

しら／＼と船見えそめぬ曉の霧うすれ行く瀬戸の入海
 島影に夕陽は落ちて仲秋の瀬戸内海はしづかにくれぬ
 なつかしき我友どちの顔次々と思ひ出されて今宵眠れず (旅行に行つて)
 うれひなき友の心の羨まし此の悲しみを誰につけなむ
 ふを投ぐる子供もありき手をたゞく乙女もありき公園の池 (猿澤池にて)

武藤千代子

沈みゆく夕日の光のうるはしき島又島も赤くてりはゆ (京都に向ふ汽車中)
 闇中にうかべる城を汽車にみて昔のことなど友と語りぬ (白鷺城)
 一日の日程終へて友達と身をくつろぎて語り合ひけり (就寝の前)
 尊くもかしこき神のとこしへに鎮りませる伊勢の大神
 宿屋でのお室がよいと友達は息を切らして告げに来るなり (東京)

村上八重

たゞ友と眞白き石に腰おろし暫し眺めつ波のよするを (海岸にて)
 高波の來るたび騒ぐ子供等の聲き、我は机を離れぬ (同)
 枕邊にまぬるき風を吹き送る海邊の風の心地よきかな (病中)
 四年振り故郷にかへり懐しき我が家に立てば幼時の偲ぼる (岡山にて)
 震災の様をはつきり思はする御堂の中にか、けし額の繪 (被服廠跡にて)

村田榮子

水清き賀茂の河原にひら／＼と友禪染の風になびけり
 旅なれぬ夜汽車の憂さにただ一人讀むともなしに頁をめくる
 大いなる杉の黒幹仰ぎ見れば遠き神代の事ぞしのぼる (伊勢)
 水の面にしだるる柳は薄ぐらき影をうつせり猿澤の池
 古びたる御堂の中に御佛の額は一すぢ光り居るなり (三月堂)

五十鈴川清き川邊にたゝすめばはるけきむかし神代おもほゆ
春日野に鹿とたはむれ遊びたる今日の一日のうれしかりけり
白樺の林の道を出でて見し男體山は雪いただけり
久々に會ひたる友のなまりもて語る言葉のいとなつかしき
つれづれに喜久の歌集をひもとけば逝きにし友のそゞろ忍ばる

白木 淑子

沿道の桑の木毎に輝ける晩秋の陽の秋らしき色

汽車は今武藏野の原をひた走る暗の彼方に灯一つ

かしこみてをろがみまつる桃山のみさゝぎの前に暫し黙しつ

ひそまれる木の間隠れに鹿遊ぶ榎木の林を通りゆきたり (春日神社にて)

見も知らぬ師の君なれど故知らずその歌あまた心ひかるゝ (歌集「紅椿」を讀みて)

浦上 登起子

とことばに眠り給へる天皇の御陵の前にぬかうくかしこさ

繪の如く青葉の中に眞白く浮び出て見ゆる渡月橋かな

大きなる包を下けて三越の階段上る歩みせわしく

燈籠に灯のつきし宵宮の美しき繪を胸に描けり (春日神社)

猿澤の池に泳ける大き鯉にふを投げてやる旅の夕に

上田 則子

青丹よし奈良の都の夕暮は鐘の音澄みて静けかりけり

秋晴れの空の廣けさ身にしめり若草山のなだれに立てば

川瀬の音ゆるくながるゝ五十鈴川手を清めたる今日の嬉しき

夜霧こむるビルディング街しづけて流し車は音なく過ぎ行く

船底の丸き窓より眺むればかそかに見ゆる小さき燈臺 (瀬戸内海にて)

上村チトセ

初めての旅をきづかひ母上は懐中薬を種々入れたまふ
 バスガールの指さす方に目をやれば疏水に浮ぶ二三の小船 (インクライン)
 名に負へる驚張はあれなりと説明き、つゝその下通る (知恩院)
 はうき目も清き御庭は唯静か御門の影のみ黒々落ちて (紫宸殿御庭)
 傾斜面に足なけ出して仰ぎ見る嫩草山の空の青きを

植田マスイエ

賀茂川の岸邊を走る車窓より友禪染の繻るを見る
 お土産に伊勢の神刀買ひたるにリュックサックの上にはみ出でにけり
 着物見て帯見て足袋見て涙ぐむ姉の在まさぬ家のさびしさ
 なつかしのドラの音嬉し門司に着けばほころび顔の父の先づ見ゆ
 雨止みし窓にもたれてありし日にいさかひし姉を思ひ出しぬ

内山代美子

旅立に涙ぐむ友さへある中に希望にもえたつ我が心かな
 いざ行かん重きリュックサック打ちかつぎホームの父に笑顔のこして
 旅立にみやこの従弟妹忍び見る叔母なきあとの寂しき姿の
 浪路わけてゆく後なる風師山登りしことも淡くのこれり
 曇りたる湯殿の窓に井筒屋の赤きネオンをしみじみと見る

宇山みどり

夢のごと日かずは経ちて早や今日は初七日の夜となりにけるかな
 (逝ける前田さんに)
 ほがらかに語り笑まひし友の姿今はいづこの國にゐますや (同)
 ありし日の寫眞をひとり偲びみれば友は木立にほゝゑみて立つ (同)
 あかあかと輝きわたる夕つ日の早や落ちんとす海の彼方に (車中にて)
 寄せ来ては又かへり行く荒浪のしぶきを浴びてわれはたたずむ (二見ヶ浦にて)

初めての夜汽車にのりてねむられず雑誌を買ひて讀みふけりたり
 日はとくにしづみたれども眞帆片帆赤く染りて美しきかな
 まだ明けぬ京都に着きて雨の中車にのりて宿へ向へり
 夜の銀座歩きながらにふと見れば小さき子供のいがほ書きをり
 空青く水清く澄む中禪寺車はとまる茶店の前に

浦野 君子

兎洞 秀子

しとくと雨降る夜に我一人眠りにつかぬ心淋しさ
 我が乗れる汽車の走るを畦道に立ちて子供は見送りて居り
 名も知らぬ小さき花を家苞に野道歩いてつみてきにけり
 夕立のやつて來るらし大空に黒雲かゝりて人々さわぐ
 どんといふ音と同時に打上ぐる夜空に花火の散る美しさ

野中 綾子

汽車は今瀬戸内海の岸に沿ひ京都に向ひ走りゆくなり
 甲板へ上りて遙か見渡せば暮れゆく海に小さき島見ゆ
 猿澤の池の面にうつりたる五重塔の美しきかけ
 秋晴に車の窓より眺むれば白樺の森林兩側に並ぶ (日光)
 湖に雄々しくうつる男體山の頂の雪かうがうしけれ (中禪寺湖)

熊谷 秀子

秋空に月の輝く宵町に遠くさやかに鐘の音きこゆ
 教會の扉も冷たき秋の朝鐘の音淋しく流れ來りぬ
 母上の心やさしき文よみて冷たき机に涙こほれぬ
 友達の旅の留守居に今日もまた鉛筆もちて獨り考ふ
 母上の言葉嬉しき夢をみて眼醒めし朝の心さみしき

母上の心づくしの荷造を背負ひこゝろみ京を夢みる
 加茂川の清き流にさらされし友禪染の風になびけり
 タぐれの秋風吹ける猿澤の池のほとりに昔をしのぶ
 玉砂利のしきつめられし參道を歩めば音のおごそかに響く
 清らなる御裳裾川に口すゝぎ心きよめて我はぬかづく

(伊勢神宮)

ほのゝと東の空がしらむときはるかに見ゆる富士の山かな
 夜おそくホームに着けばひつそりと驛夫の聲もさびしかりける
 大内山の松のみどりのいや濃きを誠心さゝけて拜したりけり
 あこがれの東京驛よ夢のごと友のゑみたる顔は見えたり
 窓明けてサツト吹き來る風さへもなんとはなしに夏らしきかな

旅立ちの友の便りのひたすらに待たれて今日も地圖をひもとく
 山すその灯夜々にさびれゆき道行く人の足音の絶ゆ
 肌寒き夜風の中を歸りゆけば道邊に白く光る葉の露
 提灯のほかけに淡き思ひ出をたどる今宵は初盆なりけり
 ほのかなる香を持てる白百合の姿美し新しき床に

一だんとかしましく鳴く蟬の聲今日の暑さの思ひやらるゝ
 ひさかたの夜空に星のまたゝきて見つむる我の心すみゆく
 初秋のみ空みどりに澄みわたり海の上高く鶯の舞ひたる
 くさまくら重ねし友の旅便り嬉しさに急ぎ擴けみしかな
 朝霧は野山にながれ道の邊の草葉の露はつめたく光る

(西戸崎海邊にて)

山本富美子

金閣寺さびたる庭邊その昔榮えし人を思ひつゝ歩めり

コバルトの空にうつれる池水に枝垂柳の先の垂れ入る（猿澤池）

これなるが馬酔木の木なりと聞かされて改めて見つ餘り小さきに（奈良公園）

五十鈴川清き流れに清めんと水底見れば小石光れり

さく／＼と眞砂白砂踏み行けばかしこさ極まり身はひきしまる（伊勢神宮）

山口 豊子

柿の實の青きがまゝに地に落ちて雨靜かなる夏の暮かな

茂り合ふ木の間もれ来て打水のたまりに宿る月の影かな

宛名書く手をふとやめてほゝゑめり友の笑顔を思ひうかべて

色づける木々の茂れる御社の森の彼方にひゞくかしは手

行きすぎる夕立雲の足はやく足立の山もはや晴れにけり

山田 晴子

空青く秋日に照れる我庭に山茶花の花今盛りなる

松多き砂丘に出づる砂道を案内をする早き足の子

嵐あと鳩なき宮の境内に白き豆のみ淋しく残る

小波のくだけでよする松原にはてなく續く眞白き砂道

小波の白くくだくる砂磯に友と遊びしたのしき思ひ出

八尋 松枝

朝顔の赤白紫とりませめて我が垣根にて咲くはうれしき

いかほどに呼べどかへらぬ姉上を今日ふる雨に思ひ出しぬ

體をば氣をつけて行けと父上の言葉も今朝はしみ／＼と聞く（修學旅行出發の朝）

九日の短き旅と思へども見送る母の姿淋しき（修學旅行出發の朝）

車窓より眺むる外の景色さへ珍しからぬ今朝とはなりぬ

松本ユキ子

ねむるあり外を見るあり讀むもあり我ふと淋し車中の夜は
 白々と朝靄こめてほのほのと松のみどりの清らけき御苑
 玉砂利に箒のあともあざやかに日華月華の門ぬち清ら
 十八階のきざはしの側に青みたる左近の櫻右近の橘
 猿澤の池にうつせる塔影に暮色せまりて旅愁をそゝる

松本光枝

すさまじき風雨の中に級友はふかく溜息つきてをりたり(久住登山)

頂上に達せし我等はよろこびと無上の誇りに言葉も出し得ず(頂上征服)

激流の上に渡せし丸木橋ロープにすがり我等は渡る(珍珠川上流で橋の工事中に出會す)

ぬばたまの夜の筑後川に篝火をあかくたきつゝ、鶴船のすぐる(旅館より筑後川を望みて)

リュックサックにつめし土産のおもたさに家の事ども思ひ出しぬ(紙木屋旅館にてお土産を買ふ)

榎屋タマエ

しめやかに時雨降りかふ京の朝汽車はホームにすべりこみたり

いや深き代々木の森の御社に今日ぬかづきし幸を思へり

清らなる御裳裾川のせゝらぎに心清めてぬかづきにけり

美しきネオンサインの宵街をしかと手をとり友と歩みぬ(銀座)

美しき湖上はるかに聳ゆるは雪いたゞける白根山かな(中禪寺湖)

丸川アヤ子

馬の尾のさやかにふれて垣の邊にさるすべりの花はら／＼散りぬ

書よみて軽く疲れし心地よきアスバラガスの味はひに似て

木の幹に身を委ねつゝ、瀧しぶき紅葉の木の間に落ち行くを見る(華嚴瀧にて)

そのむかし友と登りしこの丘に宵待草の今宵も咲けり

ふと見たる湯殿の窓に白月の淡くかゝりて秋を知りけり

今日も又雨降り續き農家にて泳ぎに行けぬ海を眺むる
 夕暮に泳ぎ疲れて眺むれば白帆かけたる漁船の急けり
 寒き夜に伯母と二人で銀座ゆくネオンサインのまばゆき中を
 三越の中には入れば観衆の聞き耳たてるパイプオルガン
 青々と空すみ渡る秋の日に若草山に登る人々

松原久子

松崎君子

赤蜻蛉羽光らせて緩やかに此の夕暮を繁く舞ひ交ふ
 すべも無き寂しきひと日しみとと我筆取りて歌を口にす
 病み臥せし父の病の重ければ學舎に行く足も鈍りぬ
 心地よく潮風の吹く松原に濱の子達の松葉搔く見ゆ
 初秋の感傷などと書きて見つ悲しき心願かへらみにけり

松尾百合子

隅田川鐵橋渡る車窓より雲の上遠く富士の山見ゆ
 中禪寺湖畔の緑水にはえ白根の山は雪頂きて
 バスの中つかれて眠き吾耳にガイドガールの美しき聲
 帘目も厳かに見ゆ南殿の大き御庭の清き玉砂利
 西陣の間屋ならびの京の町赤き格子も古めきて見ゆ

松下敏子

我が身をば案じ給へる母思ひべんとりなほす京の朝かな(大津屋旅館にて)
 五十鈴川清きに棲めるうろくすも清く尊く我が目には見ゆ
 あけほの、富士をみとめて乙女等の眼は喜びに満ちあふれたり(夜汽車にて)
 さわがしき聲に眠を破ぶられて何ぞと問へば富士見えたりと
 せまり来る黄昏時の堤防にギターを手に持つ少女の影見ゆ

猿澤の池のほとりになく鹿の聲もとだえて奈良はくれゆく
 五十鈴川清き流れに手を清め大神の前にぬかづくかしこさ
 紅葉せる男體山の麓近く華嚴の瀧は岩しぶき立つ
 大き蓄二三附きけりアマリス濡れたる壘は太くあるかな
 雨霽れて遠く聳ゆる山肌に夏の光の鮮やかにさす

前田 房子
 前川 初枝

今は亡き人のみ作に讀み耽り思はず過す晩秋の夜
 待ちかねし旅行に準備急がしき友どちの姿いとも楽しけ
 山の端にかかりし雲もいつかうせ大空高く蒼舞ひ行けり
 初盆の家に飾りて燈籠の華やかなるが一しほ淋し
 曉に起出で庭の百千草ふみ分け行きぬ裾をぬらして

眞鍋眞砂子

嫩草の山の麓の刀屋が長き刀を抜きて見せたり (奈良)
 我が汽車のひたばしりゆく武藏野は夕靄低く刈田を匂へり
 日はすでに水平線に落ちんとすみさき廻りて歸り行く白帆 (瀬戸内海)
 國の爲はてし御靈の靜まれる社おろがむ今日のうれしさ (靖國神社)
 秋草の繁みの中に紫の野菊の花の一輪咲けり

前田 時枝

我が呼べど見かへりもせで行く友の後姿の冷たくわびし
 餘念なく遊べる子等の影ゆるゝ土蔵の壁に夕日赤きも
 鉛筆をけつる音絶えてものすごく試験の室の靜まりかへる
 幼な兒の乗り捨て行きしブランコの淋しくゆるゝ櫛の木の下
 氣持よき秋日を受けて浮び立つ嫩草山に鹿の遊べり

藤本とし

五十鈴川の水際に立ちて手を清め神の御前にぬかづきにけり
 きざはしを上りつめれば聖帝の御靈靜かに眠りますところ
 嫩草山一面の芝生色青く鹿のなく音のかなしく聞ゆる
 名にしおふ大き佛は靜坐して何を思ふか我を見つむる
 富士の嶺を仰がんものとひた走る夜汽車の窓に顔よせて見る

藤田スミエ

猿澤の清き水面にうつりたる五重の塔の姿ゆかしき
 池水にそつとうつせるしだれ柳影美はしき夕ぐれの池
 朝まだきうすぎりこむるを我船は靜かに着きぬ門司の港に
 晩秋のひそけき庭にたゝすみて友の愛でるし山茶花にみいる
 リンデンの並木を歩く姿よと友は送れり懐かしき寫眞

藤田齊子

今日も又暮れんとすなり何事も善き事せざりし淡き悲しみ
 砂地越え松原こえて聞え來る海の響の重きくもり日
 道ばたの名もなき草にうちまじりうす桃色に咲けるなでしこ
 我が家の軒に巢ひしすゞめらの巢立ちて今年の夏もふけゆく
 大空に軽く浮べる白雲は幼き頃の夢にも似たり

布野イツ子

リュクサツク背おひてのぞく汽車の窓我師我母手を振り給ふ
 山の家ランプの下で夜更けまで我等語りぬねられぬまゝに
 聞きなれぬ流の音にふとさめて靜かに眠る友の顔見ぬ (同)
 うちあふぐ久住の山の大峯に朝霧かかり山路はるけし
 秋の夜のネオンサインの美しくただほんやりと銀座を歩く

(法華院にて)

藤戸和子

緑濃き千代田の城を目のあたりをろがみまつる今日のうれしさ
 松原にゆふぐれの色たゞよひて白帆か、けし舟歸り來る
 限りなき物寂しさにうち仰ぐ夜空は星のまた、きて居り
 塔の影をうつせる猿澤の池水しづけく古へしのぼす
 やりどなき物寂しさに一人來ていこひし岡に月見草咲く

藤山眞子

土手行けば月の光のくまなくて遠く灯影のかたまりて見ゆ
 五十鈴川清き流れに手を清め杉の木立の中をゆきけり
 銀座裏秋風身にしむ暗がりによたい車のともし火ゆらぐ
 さむく、と夜汽車の椅子にうづくまり口あきて寝たる友のかはいさ
 人混にもまれく、てともすれば姿失ふ淺草の宵

藤井愛子

晴れ渡る波浪静けき海の上舟は西山さして走れり
 町角の床屋の前に人たかり野球放送に聞き入りてをり
 うれしさにまぎれてさはぎ我々はつかれてねむる旅の夜汽車に
 五十鈴川清き流に手を清め心もすみて神にぬかつく
 あこがれの東京に行き立ち並ぶ建物見ればおどろかれたり

藤田茂代

あこがれの富士の姿は暁のうす闇の中に白くうかべり
 水はすみ流れゆたけき五十鈴川手を清むれば魚もよりくる
 限りなく廣がる芝生を庭として遊びたはむる、鹿の群かな
 ふけて行く廊下つたひて歩み行く靴音聞けり一人さびしく
 さはぐ聲にふと目をさまし外見れば雪をいたゞく真夜中の富士

(萬世ホテル)

嫩草の山に登りていこふ傍に菓子を求めて鹿の寄り来る
 美しきコスモス咲けるホームには人影見えす秋風の吹く
 甲板に潮風うけて友と二人故郷の歌をくちすさびつる
 甲板に登りて見れば燈臺の鈍き光の一つともれり
 垂乳根の母の便りを受けとりてしばし見つめぬ懐しき文字を

小林 清子
 小島 俊子

緑こき鳥影を出づる白帆かな眞夏の海は平かにして
 はるかなる燈臺の灯は青くしてやみの船路を靜かに照らす
 潮風の吹く甲板にたゝすみてまたゝく星を眺めるにけり
 星なき夜只波頭白くして海原渡る風の涼しき
 美しきテープはもはや切れはてゝ我が乗る船は方向をかへぬ

小出 義子

そのかみを物語りする心地して奈良の牡鹿はいとほしく見ゆ
 嫩草山の草にまろびて仰ぐ空胸いたむ迄澄みきはまれる
 燈籠の續ける途を歩みつゝ宮詣でせし宮人思へり (奈良)
 東大寺の鐘なりひゞく嫩草山鹿群れ遊ぶ夕なりけり
 ひそやかに旅愁わくなり甲板に瀬戸内海の夜を行く船

近藤 恭子

母上がわれの幼き思ひ出を語りたまへる眸なつかし
 床にふす今日も空しくすぎにけり庭の白菊今盛りにて
 みとせ前遠く別れし師の君の面影偲ぶ今宵なりけり
 秋の日は清くあかるく澄みたれどブラタナスの葉の枯れて淋しき
 さらくと葉ずれの音のきこえ來てわれにはわびし初秋のころ

参道を列を正してしづく、と神前に向ふ玉砂利ふみて
 白樺の林の道をすぎ行けば中禪寺湖は眼前に見ゆ
 走りゆく貨物列車の格子戸に顔すりつくる牛の目悲し
 友達と夜の銀座をあるきつゝネオンサインの立派さをほむ
 十一時オリズムピツクの放送をラヂオをかこみみんなきゝけり

國府比佐子

ふとさめし夜汽車の中はうす暗く車は果なきやみ行く如し
 はきすてし下駄緒の上に霜おきて日に輝けり登校の道べに
 弟のさそふ聲に出て見れば外には青き十五夜の月
 母上に買つてもらつた長袖を着るもうれしき七夕の宵
 裏庭の木の葉の夜露は燈火の光をうけて螢とまがふ

古賀静子

古賀壽美子

アカシヤの木影なつかしくさゝの思ひは多き舊校舎かな
 淋しみてふと見上げたる空の果にわづかに浮ぶ白雲のちる
 枯れもせず我が文机に今日も又咲き匂ひたる一本の花
 爽涼の秋廻り来て八千草の美しく咲けり野にも山にも
 勉強に疲れて見上げし大空は緑に晴れて白雲の飛ぶ

小島輝子

窓に寄り表に遊びし子を見れば亡き妹の事ぞしのぼる
 今までは可愛ゆく遊びし妹は歸らぬ旅に早旅立ちぬ
 風そよぐ秋の光に照らされて飛行場に見ゆるダグラスの姿
 校庭に我一人出て木にもたれ思ふは旅する友の身の事
 道ばたに咲きし野菊の花の如つつましやかに人はありたし

猿澤の畔に立てる柳にも夕もや濃ゆく立ちこめにけり
 部屋ぬちに飾りし花の優しくも風にゆられて我をなぐさむ
 雨降りて庭の草木のいき／＼と色めき立ちぬ夏の夕ぐれ
 叱られて心悲しく唯一人空を仰げば涙湧き出る
 學び舎のプールで泳ぐ面白さ眞夏の光輝く中に

是石八重子

江口博子

生ふるまゝ大きく茂りし庭隅の胡蝶花の葉蔭にこほろぎの鳴く
 汗ばみし額を拭ひ佇めば前の木蔭に頬白の啼く
 稻刈の老婆は腰をのばしつゝ我等の汽車を見送りにけり
 山峽やまがせの小さき家の庭先にたわゝになれる赤き柿の實
 朝靄の遠きかなたにほんやりと雪をいたゞく富士の峯ねの見ゆ

江口ハマ子

朝まだき京都の町は靜かにて音なく降る雨先づ心ひく
 嫩草山芝生のなだりのあちこちに秋の日あびて鹿あそびをり
 澄みわたるみもすそ川に降りたちて冷めたき流に我が手を清む
 頂上に眞白き雪を頂きて山は湖水に影をうつせり(中禪寺湖にて)
 頂に眞晝の光照り映えて緑美しき嵐山かな

安藤田鶴子

心にもあらぬを言ひて争ひし後のわびしき遣り所なき
 兩側の人家の障子新しくはりかへられて冬は来りぬ
 日に二度の郵便の聲待遠し友の返しを待つこの頃は
 吾が植ゑし朝顔咲きて美はしと病の姉はほゝゑみ給ふ
 「明日晴」の聲に窓あけ首出せば北極星のまたゝきて居り

放牧の牛くさをはむ高原を雨に濡れつゝ進みゆきけり

高原の草の中より咲き出でしほの紫のアイリスの花

草深き山路をゆきて郭公のなく音にしぼし耳かたむけつ

ほのかなるランプの下で食事せり法華院の宿のはだきむき夕

黒き鶴をあやつりながら鶴飼舟かゞり火あかく眼下すぎゆく

(五首九住登山)

有川 榮

大宮のひろき御庭の砂の上箒のあとも尊かりけり

うす寒き銀座通りの夜は更けて往きかふ人も淋しかりける

神います千代田の宮に日の照りてをろがむ我の悦に満つ

東京の街も暮れゆき中空にひとり瞬くネオンの光

庭隅の桐の葉かゆに日ぐらしの鳴きて靜かに今日も暮れゆく

有田 芳子

猿澤の池畔に聞ゆる入相の鐘靜かなる奈良の夕ぐれ

榊木の蔭うづくまり居し宮の鹿人なつかしけに我を見まもる

古の面影こめし猿澤の池水にうつる五重の塔影

金閣寺北山殿をおとづれてそゝろ昔のしのぼるゝかな

朝霧のしめやかにこむる猿澤の池畔に立ちて友を偲びぬ

青木 愛子

川堤のそぞろ歩きの道すがら遙かにも見る祭の花火

聞き慣れし祖母の注意も胸にしめ今日初旅に出でゆく我は

かねてより噂にききし日光の東照宮を今をろがみぬ

淡暗き中を通してよく見れば富士の嶺黒く車窓より見ゆ

初秋はおとづれにけり庭先の小さきコスモス蕾をつけて

荒木登美枝

早くより待ちに待ちたるたのしみの修學旅行はいよゝきにけり
 車中よりはるかに遠くに見出して眞白き雪の富士を拜みぬ
 猿澤の池の畔にたゞ立ちて水面にうつる五重の塔見る
 宿につき友とさゞめき語りつゝ就床時刻もわすれるにけり
 朝曇りのあたりひそけく遠からぬテニスコートに毬の音する

佐野昌子

猿澤の池のほとりの青草に幼き子等の鹿と遊べり
 青によし奈良の都はもの古りて鹿の鳴く音の淋しくきこゆ
 中禪寺湖のほとりに立ちて眺むれば男體山の秀でて見ゆる
 御佛を迎へるためのみあかしも今日は淋しきうら盆の宵
 砂ほこりあけてトラツク過ぎにけり今日の一日は何事もなし

佐藤芳子

久々に歸りし兄を取りまきて親しく語るこの夕かな
 打水を濟ませて庭に佇めば風鈴の音さやかに聞ゆ
 泳ぎ疲れてふと見上げたる大空の彼方に白きちぎれ雲飛ぶ
 満々と水たゞへたる遠賀川水面に浮ぶ船繪の如し (青屋に行く途中)
 水打ちし庭の草花ながめつゝ離れのラヂオ聞く夕かな (中津にて)

坂本ヒサ子

石段を上りて見れば目前に綾杉の木は暗く繁れり (香椎宮にて)
 犬ころは己の聲に驚きてなほも激しく吠えつゞけをり
 田舎なる叔母の許より便あり近き間に柿を送ると
 慰めの友の言葉をさへぎりぬ危く涙のこほれんとして
 石けりをして遊ぶ子等の黒髪のたばねに散れる白藤の花

青丹よし奈良の都の夕暮を清く澄みたる鐘のひびき來
 内海の夕燒空の美しき海の面に影をうつして (車窓より)
 清く澄む中禪寺湖の水面を靜かにすべるボート眺めぬ
 夕立のふりたる後の涼しさに一時忘るる日盛の暑さ
 夕立にしめれる庭に音たて、線香花火が散りて落ちけり

佐生 稻子

坂田 ミサヲ

幼なごも母に手とられのほりゐる草やはらかき若草の山
 畏みてをろがむ我の眼の前に大内山のけむりたなびく
 朝靄の中をあるけば吹く風のそゞろみに沁む初秋の朝
 草叢に澄みたる虫の聲々の夜なく、ふるゆく初秋の夜
 涼風に小波ゆれて浮草のかけに集る金魚の群かな

佐藤 静子

夕涼み練兵場に行き見れば蟲の鳴く音の涼しく聞ゆ
 旅行より歸れる友より話きく旅行はいかに楽しかりけむ
 繪葉書に大津屋旅館の寫眞あり懐しく見る居残りをして
 旅立ちし友と別れて學校へ急ぐ我等の心淋しき
 旅先の友が送れる繪葉書一枚さへも懐しきかな

清澄 絹子

降る雨に枝垂櫻も芝草も憂含みてかすかに煙る (圓山公園)
 廣々と靜もる御所の庭園にふむ玉砂利の音さえて聞ゆ
 とこしへに尊き帝この土地に靜もりますと思へばかしこし (桃山御陵)
 古の歌によまれし馬酔木の木はじめて見たり此の古都に來て (奈良公園)
 大帝の徳を慕ひて國民の捧けまつりし樹々綠なり (明治神宮)

洋服を着た女等の漕ぐボート楽しげに見ゆる川祭かな
 木の下を赤きはさみの蟹の子がのろゝ、歩く夕立の後
 頬やつれ青き顔してわが兄の本讀む姿淋しかりけり
 なんとなく寂しい感じの奈良の町友と連れだち散歩するかな
 貴くもかしこき御魂は安らげく代々木の宮にしづまりませる

宮崎 桂子

池水に涼しき夕風わたりきて玉とみだるゝ蓮の露かな
 茂り合ふ杉の梢にかしましく暑さをそへて蟬鳴きしきる
 暑き日に鳴きたつ蟬の聲々は一しほ苦しう我が耳をうつ
 タぐれに寂しき驛に汽車とまり鶏籠いくつも下されにけり
 茂りあふ鎮守の社に雨すぎて蟬の鳴く聲また一しきりなり

(車中にて)

三木 君子

夜のとばりおほへる瀬戸の沖はるか漁火淡く見ゆるさびしさ
 いさめども目ざす久住の山見えす霧深くして雨つよく降る
 桃山の御陵の前にをろがめば自づと頭の下る畏さ
 うすくと夕靄動く武藏野にからすの飛びて夕さりにけり
 小夜更けて灯うるみし燈臺は港で別れし友の思出

宮野 静子

吹く風に池の柳のかけうつす昔ながらの猿澤の池
 うすぐらき榊木の林の下かけに人戀ふ鹿のかけ見えにけり
 池の面に映れる九輪の塔のかけ榮えし奈良の昔しのぼる
 猿澤の池の面なる衣かけのかけ静かなり秋のさびしさ
 瀬戸の海はるか彼方を見渡せばおほろにかすむ中國の山

北原三津子

雨あがり土のほひをなつかしみ草をむしりて心すがしき
 十年の長き月日を教へ子の爲にさゝけし恩師尊し
 ふるさとはこひしかりけり去りし日のあどけなき頃を思ひ出でつゝ
 便り来れば額を合はせ讀みにけりスタンプのあとをしみんと見て
 今日には奈良明日は京都と噂しつゝ留守居の一日長くあるかな

宮崎ミキ

峠路に別れし友のうち向ふ夕べの村は雨に暮れつゝ

夕顔の花ほの白くたそがれの茅屋の軒に浮びて見ゆる

見も知らぬ人にまじりて湯にひたりしみん、あれば旅はわびしも
(船中の浴場にて)

忘るなき震災記念の壁畫なり亡き姉のことと思ふ悲しさ
(被服廠にて)

眠られぬ此の夜更けつゝ、獨り起き枕邊の書ひも解きにけり
(天津屋旅館にて)

水野富士子

こゝちよき秋の陽うけて砂濱に友と語りつゝひるけをひらく
(西戸崎遠足)

銀色のダグラス號は大きな機體横たふ我が目の前に
(飛行場見学)

青空に舞ひ上りたり傳書鳩今日の佳節を祝ふがごとく
(明治節)

久住山險しき道をのほりきて見おろす目下は霧のとざしつ

登りゆく山路はたのしかたはらに放しがひせる馬のいななく

宮原麗子

太陽は小島の陰に沈みにけり白帆を赤き色に染めつゝ
(車窓より瀬戸内海を臨む)

おりたてば雨にけぶれるあこがれの街は靜かに眠り居りけり
(京都)

青黒くどんより濁る猿澤の池にうつれる五重の塔かな

青々と綠色濃き堀水に水鳥靜かに遊び居りけり
(宮城)

線香の煙絶えせぬ墓石の一つ一つ名を辿りゆきにけり
(泉岳寺)

洋服を着た女等の漕ぐボート楽しげに見ゆる川祭かな
 木の下を赤きはさみの蟹の子がのろゝ歩く夕立の後
 頬やつれ青き顔してわが兄の本讀む姿淋しかりけり
 なんとなく寂しい感じの奈良の町友と連れだち散歩するかな
 貴くもかしこき御魂は安らげく代々木の宮にしづまりませる

宮崎 桂子

池水に涼しき夕風わたりきて玉とみだるゝ蓮の露かな
 茂り合ふ杉の梢にかしましく暑さをそへて蟬鳴きしきる
 暑き日に鳴きたつ蟬の聲々は一しほ苦しう我が耳をうつ
 タぐれに寂しき驛に汽車とまり鶏籠いくつも下されにけり
 茂りあふ鎮守の社に雨すぎて蟬の鳴く聲また一しきりなり

(車中にて)

三木 君子

夜のとばりおほへる瀬戸の沖はるか漁火淡く見ゆるさびしさ
 いさめども目ざす久住の山見えす霧深くして雨つよく降る
 桃山の御陵の前にをろがめば自づと頭の下る畏さ
 うすくくと夕靄動く武藏野にからすの飛びて夕さりにけり
 小夜更けて灯うるみし燈臺は港で別れし友の思出

宮野 静子

吹く風に池の柳のかげうつす昔ながらの猿澤の池
 うすぐらき榊木の林の下かけに人戀ふ鹿のかげ見えにけり
 池の面に映れる九輪の塔のかげ榮えし奈良の昔しのぼる
 猿澤の池の面なる衣かけのかげ静かなり秋のさびしさ
 瀬戸の海はるか彼方を見渡せばおほろにかすむ中國の山

猿澤の池の畔にたゝすみて鹿のたはむる様をみてゐぬ
つれづれに母にたよりせし我文も今は記念に残されてをり
緑濃き大内山を目のあたり拜して胸のすくをおほえぬ
華かな銀座通りを散歩すれば珍らしき物ならびをるなり
静かに降る京の街を一臺の自動車は行く夕霧の中を

宮城 年子

志道 淑子

三ツ四ツと燈臺の光を數へつゝ眠れぬ夜を我慰めぬ
大帝の永久にまします桃山の御陵の前にぬかづきにけり
朝まだきもやにつゝまるる東京驛は迎への人の待ちてありけり
頂に雪をつけたる男體山の姿うつせり中禪寺湖は
その昔の尊き御儀のしのばるゝ榎原の宮に落葉して居り

篠原 伊磨子

床に入り眼閉づれば遙けくも旅路につける友等思ひ出づ
發車告ぐる汽笛ひゞきて打ち交す別れを後に汽車は去りゆく
秋空の清くも澄みて昇りゆく日の丸の御旗朝日に映えたり
いたづらにすぎゆく月日見送りて一人悲しむわが不甲斐なさを
夕立の晴るるがおそしと法師蟬秋立ちし今日を高らかに鳴く

城野 環

はじめの夜汽車にのりしうれしさに窓あけ暗き驛をのぞめり
よろこびをのせつゝ汽車は過ぎ去りぬコスモス咲ける小さき驛を
かぎりなき楽しき心抑へつゝ友と歩みぬ背の都を
嫩草の山にねころび青空を眺めし友は涙うかべつ
國道に枝さしのべて紅色の柘榴の花は咲きそろひたり

庄崎喜久子

夕映にあかねの雲の漂へる瀬戸の内海の美しきかな
 清水の-high 舞臺に登り行き音羽の瀧を友とめでけり
 人馴れぬ子鹿の一つこはごはとあしびのかけにさまよひてあり
 秋の日を背に受けつゝさまよへる鹿の目やさし嫩草の山
 池の邊にさまよひてありしさを鹿の餌を持つ我に近づきにけり (猿澤の池)

島田千代子

何時の日に又來る街ぞ窓の外に遠ざかる景の悲しくもあるか
 夜半に聞く汽笛の音にも友人の旅する様の見ゆる心地す
 朝霧に霞む鐵路にたゞすみて旅行く友をしのびるたりき
 友ゆきて廣き教室に寒々と残れる者の佗しきつどひ
 ほのかにも夕餉の匂流れくる冷たき闇を急ぎて歸る

島田アキエ

朝ほらけ古き都の霧雨に寶珠輝く三條の大橋
 朝あけの海に映りて綠濃き幾日振りの古郷の山 (關門海峡にて)
 床に置くグラデオラスは咲き出でぬ覺明るき夏の夕日に
 朝風ぎの川面に映る夏の雲丈延びし草の間にぞ見ゆ
 雲去りし夜空にさゆる秋の月雨に濡れたる蔓草の光る

柴田朝子

夜のふけに車輪の音にめざむれば安らかにねむる人々のかほ
 海の面は黒きとばりにおほはれて島々に見ゆ淡き光の (瀬戸内海)
 驛前に整列してもなほしばしネオンサインに心ひかれつ (東京)
 ひた走る汽車の窓邊に名にしお富士の高嶺のきはたちて浮ぶ
 山々の紅葉をめでつゝ友達と小舟浮べる水面ながめつ (日光)

美しき松の並べる砂濱にひるけをひらき友と語らふ
 うすら寒き朝空をふと見あげれば淡き光の月ぞ残れる
 妹の寝顔のぞけば愛らしき夢を見るにかにつとほゝ笑む
 雨上りまだ晴れきらぬ大空に爆音たかく飛行機のとぶ
 留守居の夜そつと月空眺むれば虫の音たかし窓邊にちかく

重木雪子

志賀菊江

雪降りし後とは知らず縁側の足の冷たさに驚きにけり (日光にて)
 目が冴えてねむれぬ夜の淋しさにたゞ一人見る天井の板 (京の宿にて)
 眞夜中にふと目覺むればゆくりなく軒につるせし鈴蟲鳴けり
 夏の宵ともしびこふる小蟲らのしきりに障子打つ音きこゆ
 とく起きて咲きそろひたる朝顔の数かぞへつゝ一人ほゝゑむ

廣吉喜美子

朝靄にかすむ街路の銀杏木に靜かにそゞ秋の霧雨 (京都驛前にて)
 京極のシヨウウインドにかゝけたる舞子姿もふさはしき街
 プラタナス青く茂りて日影さす廣き帝都の空は晴れたり
 常磐なる松の緑と白き壁映せし堀の水のかしこさ (宮城)
 眞白き雪を頂く奥白根陽の光うけ輝きてをり (中禪寺湖より)

東美也子

垂れこめて暗きが中に大和琴の神さびし音に神代思ひぬ (伊勢)
 老人の黄菊手に手に参り来る淺草寺の菊祭りかな
 谷間ゆく水の流れの音冴えて雨とぞ思ふ旅の枕に (久住登山)
 祖母植ゑし瓜のみごとに出來たるをあした取りきて靈前にさゞぐ
 朝まだき湯煙あがる海岸に仰ぎて見たる高崎の山 (龜川)

久光きみ

かがり火に鶴匠の顔もかがやきて鶴飼の船は近づきにけり (日田盆地)
 三隈川にかかれる橋の名しらぬが渡月橋にも似たりとみゆる (日田盆地)
 静かなる猿澤の池に影うつす雲の動きの早き夕暮
 水清き五十鈴の流れに身を潔め我はぬかつく大宮の前
 うつくしきネオンサインに照らされて柳の銀座我は行くなり

日野ミチエ

内海の小さき島の燈臺のともしびあかし秋の夜空に
 朝もやに遠くかすみて聳えたつ五重の塔に昔偲べり
 美しく夕日照り映えて瀬戸の海波静かなり小舟漕ぎゆく
 ベルリンの放送聞きつゝ我も又汗を握りき接戦の時には
 ベルリンの大空高く翻る大日章旗を内地で偲ぶも

日高節子

月影のさやかにゆるる海の面を我が乗りし船進み行くなり (瀬戸内海)
 五十鈴川清き流れを見つめたり底の小石までいと清きかも
 五重の塔しづけき波に影うつす池のほとりに鹿あそびをり (猿澤池)
 山の木々皆紅葉して美しき影をうつしたりすみたる水に (中禪寺湖)
 奈良の山そごろあるけば人慕ひ小さき鹿のより来るなり

平岩トミエ

はだ寒き夜風いとはず猿澤の池のほとりに友と語らふ
 とほくきて故郷の人に便りするつきしばかりの宿の部屋にて
 ぬばたまの闇の夜空の一角にほんやりとみゆしらすぎ城は
 白樺の林の小徑のほり行けば膚さむくおほゆ瀧のしぶきに (日光)
 嵐山したしき友とかたらひて寫真にうつる今日の記念に

いく度か姿變へては青空に消え消えてゆく雲のかなしさ
 夏の日の淡き想はひもすがら入道雲の上にもゑがくも
 うそ寒く小雨降る宵何となくインキの色も黒う沈めり
 久方に親しき友の聲きゝて電話口にて笑ひあひけり
 朝夕に涼しくなりし此の頃は吹く秋風に蛙の聲きく

廣野満子

久有みゆき

夏の夜のねぐるしき宵めざませば笛の音遠く淋しく聞ゆ
 友來り我が身案する心根にあふるる涙とどめかねたり
 わがために案ずる事の多くして面やつれせし此の頃の母
 初旅の途よりかへれる友かこみ行く先々の話きくなり
 一人居のものわびしさに仰ぎ見る足立の山に月はかかれり

森敏子

うるはしきさゞれ石敷く參道をみなかしこさに打たれつゝ歩む(桃山御陵)
 芝の上に這ふかと思ゆる形よき松は色濃く秋の陽に映ゆ(御所にて)
 茶畑の小路ゆきつゝ茶の一葉つみかへりけり旅の名残に(宇治にて)
 みたらしの五十鈴の流清らけく底の小砂利もさやかにうつる
 かしこくも數多木立にかこまれし宮居はろかにをろがみまつる(内宮)

森節子

秋の日を旅ゆく人の姿にも似てさびしかり銀のほすゝき
 秋晴れの眞青に澄める大空に片割月の白くかゝれり
 汽笛の音聞けばそゝろに旅先の友の姿の胸に浮ぶも
 我が窓にあしたの光みなぎりて心うれしく机に向ふ
 何となく心たのしく繪日傘をかゝけて仰ぐ空の眞青さ

足立山登りつむれば熊笹の中にきりぎりすしきりに鳴けり
 病癒えて姉の額づく此の朝の社の鈴の清く響けり
 物の音皆澄み渡る初秋の朝すがしく庭にたゝすむ
 山を下り川邊の原をさまよひて萩尾花などさがしもとむる
 大嵐に垣もろともに倒れたる朝顔の花そのまゝに咲く

森 保子

森藤千鶴子

唯一日故郷離れて旅行けばそゞろに戀し我が家の灯
 大津屋と文字太々と記されし旅籠へ着きて我は嬉しも
 平等院の古くさびたる池の面に淋しけに浮く木の葉三つ四つ
 猿澤の池の畔に佇めば數多き鹿集ひ來れる
 久々に會ひたる叔母と二人にて歩く銀座の夜は嬉しき

森 本 千 歳

行水をすまして縁に腰をかけ草葉の中の蟲の音を聞く
 長椅子にもたれて空を仰ぎ見る廣きみ空に星二つ三つ
 秋日照る我が庭べに小雀が餌を拾つて二三遊べり
 カーテンを洗濯しつつ友よりの旅行の手紙今日も待ち居る
 日の出づる頃ともなれば朝靄が野山をこめてしらじら光る

森 本 み さ を

緑濃き阿蘇の森にてふと耳に淋しき聲のかつこうを聞く
 空高く月さゆる今宵窓により友を送りし海を思ひ出づ
 霧深き杵島岳の中腹を仔馬の争ひ走りゆく見ゆ (久住にて)
 森深き宿の縁にてほのかにも透間とほして見ゆるともしび (阿蘇湯の谷にて)
 放牧の山羊もかはゆき親子づれかなしくなきて叢に逃ぐ (久住高原にて)

友語る土産話に我はたゞ未だ見ぬ京をうつゝにえがきぬ
 疲れはて家に歸れば我が友の京の便りに心うばはる
 朝まだき遠き彼方を眺めつゝ友の便りをまちわびにけり
 教室の窓より見れば日のあたる足立の山は彼方に聳ゆ
 晩秋のそよ吹く風にひら／＼と枯れし木の葉の淋しく散りぬ

元木 正子

東京驛に友見えざれば我一人ネオンサインを暫し見つめぬ
 い寝られぬ夜汽車に宿る度母に父母います我が家懐かし
 我が家に歸りて見れば誰もるす菊の香の高く漂ふ
 十餘り今朝は咲きたりと朝顔の庭に下りゆく弟と妹
 懐かしの友の便りを擴けつゝ一人微笑む午後の日射しに

末松 三知

その上の大和の匂ひなつかしみそぞろ歩きぬ奈良の都路
 まろらかな嫩草山の上に遊ぶ小鹿の群の影のしづけさ
 猿澤の朝のかすみにもふと見えし五重の塔を今も忘れず
 我も又をさな兒のごと首かしけ毘盧遮那の顔をしばし眺めき
 うすもやのあしたにききし京ことば旅なつかしく胸にひびきぬ

末次 絹子

一面に芝生つゞける丘の邊に鹿の姿のあちこちに見ゆ
 五十鈴川清き流れに鯉の群集ひて泳ぐ背鰭を見せて
 晴れ渡る湖通し白樺の林のあひに見ゆる雪山
 もみぢ葉の我が背に散りて高山の風は寒けく身にしみにけり
 今日も又親しき友と諸共に見學終へて宿にかへりぬ

(日光)

杉山房子

新しきリユツクサツクに色々と旅行の道具入るる嬉しさ
 嫩草山三々五々とたむろせる芝生の上へ秋の日の影
 古びたる燈籠のかけにねそべりし鹿は我見て立ちおじぎせり
 一日の見物をへて風呂あびて寢床に入りて家に手紙かく
 晴れ渡る湖こえてましろなる雪につゝまるる白根山かな

助川とき子

しとゝと秋雨降りて京の町おほろにかすむ山々の見ゆ
 いつの間に覚えこみしか可愛けに頭さけつゝ餌をこふ神鹿
 ながゝと餘韻のこして消えにけり昔偲びて暫したゝすむ (東大寺)
 幾萬の御魂祭りしこの堂に詣でゝふかく當時をしのみぬ (震災記念堂)
 遠山に白雪つもり水面吹く秋風寒く身にしみにけり (中禪寺湖)

角一恵

梅雨のごと日々雨續き庭の縁の棕櫚のたけむら涼味そゝりぬ
 山風の吹き渡りをる軒先に岐阜提灯の影のすがしさ
 夜を一人ふみ讀みをればラジオオラスの香靜かに漂ひ匂ふ
 あした窓あくれば清き風入りてラジオオラスの香あらたなり
 我が理想なしとけ心安らけく日を送りをる友のともしさ

三
年
集

朝倉シヅエ

のみほし、水筒持ちて我先と清水をくみに坂道を下る
岩かけにかくれてなれる木の實をば岩をつたひてとりに行きたり
破れたる旗を目當てに友達とかたり合ひつゝのほり行きたり
我が肩をはるかに越えしコスモスの花咲き亂れ秋盛りなり
庭隅に大きく咲ける紅ダリヤ枝もたわゝに今盛りなり

有田艶子

花匂ふ机に向ひコスモスの匂をかぎて學ぶ嬉しさ
我が友のあたゝかき面さながらにほのかにほふコスモスの花
蟲の聲さびしく聞ゆ秋の夜の着物縫ふ手の針の冷たさ
コスモスのかほりほのかに陽にほひ待ちにし秋も訪れにけり
清らかなにはれた空には雲もなくほのかにほふ草のほひよ

安藤 包子

コスモスを一枝折りて弟の机の上に飾りてやりぬ
 野山よりすゝき野菊をとりて来て花瓶にさしてひとりほゝ笑む
 一息に岡に上りて息づけば汗ばめる顔を涼風の吹く
 秋の野にひとり淋しく咲いてゐる可憐な花よ野菊の花よ
 溜池のほとりに休み眺むれば水面にうつる木々は美し

井澤 信子

寝ころびてすだれ越しに見る青空に大きく浮ぶ雲の白さよ
 空高く白雲わきて庭面には彼岸の花のむれ咲きてみゆ
 のどけさにうたゝねすればたらちねの母は手づから夜具持て来給ふ
 歡聲にふと上見れば山頂に友達笑みて手を振りて居り
 潮風にはためく旗の下キタに立ちて風師山征服と友ほゝ笑めり

伊藤 好子

朝ぎりに姿はそれと分ねども後より友のさして来るらし
 菅公の住まひ給ひし榎寺今も淋しく秋風の吹く
 そのかみをうつしたゝふる水の面にゆたけく泳ぐ鯉のむれかな
 梅が枝のお餅求めて兄君の清き御靈にさゝけまつらん (太宰府三首)
 秋風にゆらりとゆるゝコスモスの花の中よりたちし蜜蜂

井口 政子

寂しけれど我が部屋めぐり柑橘のつぶら實うれて心樂しも
 拓けゆく此の山畑にゆたけくし物みのる日を思ひつゝ行く
 登りゆく細き山路の静けさに疲れし體暫し休むる
 香ばしきゆけたつ紅茶のむ時に我が胸遠く南國を想ふ
 星の夜に遠く嫁ぎし姉上の顔思ひてはひとり涙ぐむ

肩ならべ二人語りて行く道の足並輕き遠足の朝
 一家内戦況如何と耳立て、ラヂオとりまく夏の宵かな
 曉の超特急と綽號せし吉岡選手惜しくも敗る
 夢のごと煙りて見ゆる湯の街のネオンサインの光なつかし
 さら／＼と肩に波うつ洗髪の清々しきがなにか嬉しも

今宮貞子

上村美智代

幼子の手を引きつれて通りたるまひるの道は靜かなりけり
 我が誇る北九州の工業地黒煙廣く空をおほへり
 此の空を今行く雲の姿をば幼き時に見たる氣のする
 電線にとまりて落つる雨だ傘をひねもす眺めて今日もくれゆく
 靜かなり石を拾ひて投げて見ぬ靜寂を破る心なけれど

上野美代子

放課後の教室に來れば今朝さししダリヤの花びらすでにしをれぬ
 幼くて死にし弟の一周忌に歸らむ朝は雨となりたり
 古びたる本をひらけばなつかしき父の姿の目に浮び來る
 ねころびて残されて行く白浪を眺めて我が身と比べみるかな
 心なき木さへ石さへなつかしき昔を語る心こそすれ (古き宮)

牛尾歌名枝

丘の道をあゆみ來りて子供らがいちめ殺しし蟻螂を見つ
 いづくにか百舌鳥なく聞ゆ森の上の空はさやかに澄みわたり居り
 朝の町霧しめやかにたちこめて行く人々の影おほろなり
 中空をつばめの如くケープルのゆきかひしけし會根の石山
 秋晴の風師の山の頂に風になびける薄しけれり

見渡せば野は一面の薄原風に吹かれてさや／＼となる
 小波の静かにたてる水の上をかるやかに船走り行くかな
 張り替へし障子を明けて無花果を數へほゝゑむ日曜の朝
 廣々と果なく續く大海原嚴柳島は掌のごとし
 人ごみに我が兄に似し人を見て我眼をうたがひしばしたゝすむ

大松多津子

賑やかに我も泳ぎしあのプール今は淋しくさゝなみ立てり
 教室にひとり淋しく残れるは私の持ちきしコスモスの花
 思出の砂津にありしアカシヤはいかになりしと一人考ふ
 友達が姉の話をする度にやさしき姉をほしと思へり
 朝早く渡廊下に出で見れば帆柱山のほのかに浮べり

岡田房子

あへぎつゝ登りて見れば頂に破れし旗の我を迎ふる
 秋の空高くきよらに晴れ渡りなきたる海に船の行きかふ
 風師山に登りて空を見上ぐれば鳶悠々と舞ひるたりけり
 日の本の力あふるるますらをが今北滿に勇み立ち行く
 わがそばに弟一人起きてるて紙折り遊ぶ更けし夏の夜

岡山美禰子

苦しさを一人こらへて登り着き征服感の心よきかな
 眞先に走り來れる弟に我思はずも聲をかけたなり
 心地よき風の吹き來て皆々のセーラーの袴吹き過ぎにけり
 何事の氣に障りしや我が友のうちとけぬ様見ればかなしき
 せし後で悪き事ごと氣がつきて後悔に我が胸はうづけり

大原 玲子

瀧つほはまだか／＼と坂道を疲れも忘れて急ぎ行きたり
 飛行機の爆音はけしき此の宵に燈掩ひて針を運べり
 校門に喜び勇む遠足の友を送りて後の淋しき
 黄昏の清く澄みたる湖に影を映せる比良の連峯
 コスモスのほのかにゆらぐ細道を馬車は靜かに通り過ぎたり

尾石 スエ

日の光脊に浴びつゝ飛込みの練習をする夏の日盛り
 こゝろこめ戦地に送る慰問袋作り上げたる時のうれしき
 毎日のオリンピックの切抜を勢込んで弟も切る
 登りつめひろき海をば眺むれば楽しき心にきつさ忘れぬ
 亡き父に似たりと言へば母もまた目に露宿し眺め入るかな

海津 芙美子

學舎に急ぐ輔道は靄深し微かサイレンの音の聞ゆる
 心にもなきいさかひを言ひ合ひて争ひし後の心寂しさ
 草土手に小さき膝をならべつゝ村の童は魚釣りて居り
 重き足ひきすりながら登りたる風師の山は高く険しき
 登りゆく路の傍に咲く尾花つみては捨てつゝ又歩をはこぶ

海津 美代子

荒れにけむ舊き校舎のアカシアの今日も散るらん淋しき庭に
 運動會明日になつたとたのしげに語り合ひつゝ妹等の寝る
 昨日死んだ小犬のにはひ庭すみの藁にかすかにのこるわびしさ
 新しき教科書買ひ来て妹は大聲あけてはこりかに讀む
 所せまくお人形ならべて一心におとなに遊ぶ母いまさぬ日

加藤とき子

燈みな消されし外に出で見れば月の光の輝きて見ゆ (防空演習の夜)

苦しさに耐へきれなくて休む時耳に聞ゆる谷川の水

うちゆらぐ薄の穂波秋の陽に輝きて見ゆ山の頂

母上の心づくしのお辨當みな輪になりて開く嬉しさ

一二町登りて憩ふわがそばに薄の穂波銀に輝く (遠足四首)

川上初代

小波のよせくる音ものどかなり秋の濱邊の朝は静けし

あか土の山路を行けばかなたよりつく／＼法師の聲きこえ來ぬ

白露のおく草むらに虫鳴けば足のはこびをしぼし休めつ

秋空に清く澄みたる三日月の今宵殊更訝え／＼と見ゆ

夕暮に幼き童の遊び居りまる／＼とした頬をほてらし

川崎道子

つかれたる目にて窓より見下せばコスモスの花は散りてをりけり

つかれたる目に映りたるブラタナスの黄色くなりて散れるも淋し

家を出て人氣の絶えし大通り通るも淋し秋の夕暮

近よればしぼし音絶え離るれば又鳴き出す草かけの蟲

故郷の母の聲聞ゆこの窓の淋しくくる、秋の夕に

河底朝子

上り坂見えかくれする友達の姿いさまします、きの中を

久しぶり遠足に來しうれしさよ友と手を取りかたり合ふなり

かへりには今日の思ひ出かたりあひたからかに笑ふ電車の中で

冷たきをこらへて友と手をにぎり水につかりし時のうれしさ

ひし／＼とせまれる夜氣にはや秋のけはひおほえて胸かき合す

北島百合子

病むわれの傍にありて柿むけるやさしき母の姿悲しも
あぜ道に小さく群れてこほれたる紅のまんまの愛らしきかな
今朝見れば庭の隅なる老椿まろきつほみの数多つきけり
頂をたどる我等の眞上をばロープウェイ行く夏の六甲
校庭の鈴かけの葉の黄ばみたり霜柱立つ武藏野おもふ(移り来て)

切明笑子

秋晴に庭のコスモス咲き亂れかわゆき姿地にうつしをり
月さえて草のしけみに虫のこゑいよ／＼しけく秋の更けぬる
青海に白波立て、スマートな眞赤き舟の通りゆくかな
天高く青海原に只一つ大きな舟の雄姿あらはす
ひつそりとしづまりかへる冬の夜に拍子木の音遠くにひびく

工藤春枝

父母の慈愛にみちた教訓に學びませうと我は誓ひぬ
あへぎつゝ登りし山の眺望にしばしが間我を忘るゝ
廣々と果なく續く玄海に水路はるかに小舟走れり
叢に日毎夜毎に鳴く蟲も憐れを添へて秋を呼ぶなり
聖賢の御心のごと風ぎ渡る大海原に小舟走れり

熊本睦子

またたけるみ空の星を眺めつつ空の不思議を思ひ見るかな
こほろぎのなく聲淋しこの夕べ母を偲びて枕ぬらしぬ
いまだにも歸りきたまはぬ父上に心かかりつ夕け終りぬ
ひさ／＼に旅よりかへり父君の笑顔を見れば何か嬉しき
試験終へ後の氣やすさひさ／＼に本箱などを片づけて見る

藏本富子

すぎし日の君を思ひてアカシアの木陰に一人たゝずみにけり
 すゝかけの緑葉かほる校庭を肩くみ歩く制服の少女
 さびしさに窓邊によりてながむればこほろぎの聲かほそくあはれ
 うらぎれる友より受けし冷き眼氣にしつゝ歩く秋の日の午後
 すがくし朝戸あくれば庭先にコスモスの花咲きぬれてをり

小林弘子

なつかしき兄の姿を思ひつゝ便り書く夜はたのしかりけり
 賤が家の荒れにし庭も風情あり色とりふにコスモスの咲く
 こぞの秋移し植ゑにし白萩の時を得顔に咲きほころなり
 風師山高くあらねど嶮しきにわれも弱れり友も弱れり
 小川をばかちにて渡り進み行くつはもの共の勇ましきかな
 (演習を見て)

相良幸子

父母と共に勵みて生くる事こよなき我の幸と思ふ
 音聞けば身にしみてこそ悲しけれ秋の夕のいりあひの鐘
 ふと見れば河原の土手の口あたりに赤きあざみが一輪咲けり
 山の端に夕日は落ちて黄昏の空を急けるむら鳥のあり
 見渡せば白き家並の立並ぶ門司の市街は眼下にひろがる

佐藤恵美子

うつむきて我が歩みゆく砂濱に澤蟹あまた這ひ出でにけり
 物干の竿にとまりて動かざる蜻蛉をみつゝ思ふ事あり
 あわたしく時すぎゆけり父逝きて一年経ちぬコスモス咲きぬ
 秋晴に鳶舞ふ空のはたてにぞけぶりて見ゆる沖の島々
 一面に尾花の白き登山道に立てる我等の心は廣し

馬方は汗をはらはず歌ひ行くだらと、坂の晝下りかな
 足立山登りて見れば幾久の海沖の小島に白帆行く見ゆ
 静かなるま晝の山の谷間を流る、川は青葉うつせり
 秋の日の暮行く空の彼方より流れただよひせまるむら雲
 暖かき友の情にむせび泣く涙の頬に秋風冷し

佐藤小夜子

佐成電子

朝の海白帆にぎやか舟いくつ向ふ通るは外國船か
 庭の桃かはゆく咲きぬ花々はわが心知りてほゝゑみしやう
 池のふち蜻蛉つる聲にぎはしき夏の休みの晝さがりかな
 あれ程の思ひで登りし山ぞうれし山海皆眞下に見えて
 風にゆるゝコスモスの花何を見て何を思ふやあいらしの花

澤野和子

庭の隅一人寂しきコスモスは一夜の嵐にあはれ吹き散る
 亡き友のお墓慕ひてわが来れば線香の煙ゆらぎるにけり
 山登り小さき道のかたはらに白穂のすゝき風になびけり
 幾久の濱よせては歸す白波に疲れし足をそつとひたしぬ
 主なくてなほ生き残る飛梅の春風吹けばにほひかんばし

四宮田セツ

ほんのりと紅く染みたる西の空うすら寒しも秋の夕暮
 秋風にそよぐ穂波の稲の田は今盛なり重みを見せて
 玄海の碧き海原眺むれば白帆上けつゝ走り行く見ゆ
 うねくと續く山路を我が友と疲れし足のあゆみを運びつ
 見る限りひろくとしたる遠賀川小波立てゝ流れつゝをり

幾たびもと便を期して別れたり明日より休みの校門の前に
 病得て床にふす身のさびしさや天井のさんも數へあきたり
 姉上の友送らむと門に出れば夕焼赤く日はかたぶけり
 五年ぶりに訪ひ來し友なりうれしくてたゞゑみあへりしばし聲出す
 白雲池の畔にあひし緑色のスワガートコートの人を忘れず

清水保子

周ます子

幼な子に蜜柑吸はせて母上に叱られたれどなにか嬉しき
 ねむる子のエブロン取れば忘れしあめだま一つころび出でたり
 今朝もまた手入れせざりし庭すみにあはれに咲きし朝顔の花
 こけむせる岩間の清水すくひたる我が手にちひさきこほろぎのほれり
 山上に立ちて海峽見渡せば波間に浮ぶ鳥影幾つ

白石ミツ

風師山登りてはるか見渡せば遠く霞めり瀬戸の内海
 風吹けばその度毎に亂れたる風師の山の枯すゝきかな
 山路来て歩み來し方見下せば遅れし人のハンカチを振る
 鯛にせきたてられて懐しき母の里より歸る畦道
 蚊帳すそに美しく鳴く虫の音を夢うつつにて聞く心地よさ

城田道子

ふみしめて山路を行けばはるかなる海の青きに心みちたり
 頂上の風に吹かれて見かへれば來し方はるか紅葉せりけり
 向山に木を伐るひびき松の間ゆ仰けば白く人動く見ゆ
 朝露のかわかぬ小徑わけゆけば我が足元に虫の鳴くなり
 落葉やく煙なつかし夕月にあはれ今年の秋もくれゆく

十五夜の月影ふみて妹と我が家へ急ぐ秋のさびしさ

進藤満子

今日もまた石打つ石屋ののみの音闇を通して淋しくきこゆ
銀色に咲き揃ひたるすすきの穂さやかになびく秋の夕暮
庭先に淋しく咲ける木犀の香かぎつつ手藝にいそしむ
コバルトに晴れ渡りたる陽の下に楽しくいただくまきずし辨當

鈴木壽子

婚禮の姉の寫眞のとゞきたり一日賑ふ店のうちかな

初めて里歸りせる姉様の日本髪はよく似合ひをり

祖母様は老眼鏡拭きつゝにこやかに姉の寫眞を受けとりにつけり

嫁ぎたるあの目をふと思ひ出す黙り勝ちなる姉様の姿

何とはなし師走の町の騒がしくわれも急ぎて家に歸れり

進來泰子

秋草のみだれ咲く野にこほろぎの淋しく鳴けり秋も近づく
土手のすみ夕日赤々落ちにけりすゞなりになるしぶがきの色
今まではどこに咲くかと待つてゐた曼珠沙華咲く土手のかたすみ
夕立にあひたる後の氣持よき島の植物皆輝けり
山あひの木の下影を過ぎ行けば秋のすゞしさ身にしみるなり

高折敏子

秋の陽をあびて海峡過ぎて行く遙々を來しオリンピックの船
すがくし秋の陽浴びて海峡を同じ様なる帆船が過ぐる
懐しのふるさと思ひ登れども見ゆるは秋の雲の一群
變電所の説明聞けり我が父とそゞろ歩みの街のはづれに
秋庭の芝生の上にござ敷きて日曜の午後本讀みにけり

海峽の波をすべりて進む小舟五つ六つ連りくさり形に見ゆ
 我が登る頭上に見ゆる若すゝき元氣つけよと我をはけます
 楽しきは我が植ゑおきし草花の日毎のびゆく姿見るとき
 板垣の向ふに見ゆる白き花名前しらねど心ひかるる
 隣よりハーモニカの音聞え來る雜巾かけつゝわれも歌へり

高倉靖

高濱ヨシ子

汗ばみし額拭きつゝ登りたる大岩の上の心地よさかな
 母上の元氣な顔を見る時は我の心も明るくなりぬ
 やう／＼に辿り着きたる岩の上一息ついて海を見渡す
 姉らしく妹の人形の着物など縫ひてやりつゝ心樂しも
 母上は我に着物を着せながらしつけの糸を取り給ふなり

竹内武子

水原の停車場近き貯水池に水鳥あまた遊びをりたり
 水清く鏡の如き洛東江に白衣の鮮人すなどりてをり (朝鮮旅行二首)
 靜かなり焚火あかあか燃しつゝ鵜飼の舟の近づきて來る
 法華院の宿のランプに人里を遠くはなれし事の思ほゆ
 母病みし朝はとく起き馴れぬ手に加勢などする妹あはれ

竹内八重子

心あらば遠き昔をたづね見むみ山の奥に生ふる松の木
 荒れ果ててをどりし路も今はなし梢さびしく秋風の吹く
 ものゝ音しづまりはてし眞夜中に犬の遠吠ひとり淋しき
 兄上の優勝メダル見るごとに在りしその日のたゞ偲ばるゝ
 亡き兄を思ひて庭に下り立てば皎々として月輝けり

竹半淳子

重き荷を急ぎ引けとて主より叱られてゐし馬を思へり
 世の中の全てのものに秋は来ていつしか田の面に黄金波うつ
 はらくと落葉は散りて秋ふかみやさしき母に皺一つ増ゆ
 落日に影長く引くわがすがた秋ふかまりて肩先さむし
 秋風にかれんにそよぐコスモスに今は別れし友を思へり

田代晶子

明けやらぬ朝のしゝまに打寄するその潮の香の懐しきかな
 疲れたる心抱きて歸る日は門邊の萩の白さいとほし
 笹原に一人寝ころび青空の雲と語り山の後かな
 ふもとにて早や疲れたる人の子にほゝ笑む如き秋の風吹く
 苦しげに息つくわれのほてる頬をそよろすぎ行く銀の穂の群

田中玉江

庭にある朝顔の花一面に今日を盛と咲きこほれたり
 青空にそびえて見ゆる日章旗我が日本の威を示しつゝ
 遠く見る秋の山々くつきりと煙波の中にそゝり立ちたり
 紅葉照る山路を一人登りゆく秋のすがしき朝日をあびて
 風師山ほそき山路を登りゆくくさむらに鳴く蟲をきゝつゝ

谷口静江

秋空の晴れわたりたる校庭に歌うたひつゝ人夫ら働く
 秋空のすみわたりたる学校の工事着々進み行くなり
 満洲の兄の手紙の来りけり心うれしく母に見せたり
 満洲にゐる兄の夢を見たといふ祖母の眼に涙光れり
 裏庭に柿熟したり戸をくれば朝吹く風も甘き匂す

檀上昌子

校庭の隅に咲きたる野うばらの見る人なくて散りつゝ今は
 大空に白雲浮かび夏日照る草野をよぎり吾が汽車は行く（久住登山車中にて）
 裏山の梨ねむの木に油蟬かしましく鳴く夏の日盛り
 我が庭を歌ひて通る男の子皆蟬取りの竿かつぎ居り
 秋の日のたそがれ時をうら若き二人の藝者湯に行くを見る

辻孝子

秋風のそよると吹けばコスモスの微笑み出でし狭き我が庭
 上り来て銀のすゝきの道筋のうねりをみつめしばし休みぬ
 あへぎ／＼わが上りゆく足下に赤き山萩みだれ咲きたり
 あの道と指し示す手は銀色の薄のかけにほそ／＼と見ゆ
 おほらかな緑の空ぞ白雲ぞ海のかなたに船の水脈見ゆ

鶴丸英子

雑草にまじりて咲ける山萩にあしたの露のいまだのこれり
 朝光のみなぎりさせる部屋ぬちに心みちたりてわが居たりけり
 こすもすの花むらかけにたゝすめばほのかに夢をたどる心地す
 朝に夕に吾れに親しむ山々の木立こと／＼黄葉しにけり
 とも／＼に争ひつゝ學びし友は今試験と便りよこせり

龜田嘉鶴子

久しぶりに尋ねて見えた叔父様のお顔を見ると涙が出ました
 柄を選ぶのに夢中になつて母さんはあれこれと山程に布を持つてる
 朝早く起きてお庭へ出て見ると白いコスモスが散つてゐました
 便りの來ないお友達へ手紙を書いてるといらだゝしいまでに静かな夜です
 あへぎつゝ登りし後の明かさ山裾の方をはるか見渡す

戸 早 久 子

そよ／＼と風のわたれば山かけに花と見まがふすゝき美し
 關門の一日に見ゆる頂に友と楽しくさゝめき合ひぬ

一二町登りて憇ふ我がそばに流れも清き谷川の水

あへぎつゝのほりつめたる頂に大手をひろけ深呼吸する

風師山みねのつゝきに長々とつゝきて見ゆるドライブの道

富 田 輝 子

警報の解除待つ夜のしづけさに鋭く響くプロペラの音 (防空演習)

人招くすゝきを見上げて上りゆく風師の山の秋は深めり (遠足)

朝毎に伸びる絲瓜の楽しさを苗をもらひし友にかたむ

落葉してねぐらに迷ふ鳥見ればひとしほ深き父母の恩

やぶれたる旗を目ざして一行は風師の山に登りゆくなり (遠足)

長 澤 雅 子

ねころびて窓より見ゆる雨風の止むをねがひて一日すごしつ

朝霧のまだはれぬ間をよろこびにみちて我等は山に登りつ (久住登山二首)

きもちよく涼みてかへる道すぢの河邊に合歡の花ぞにほへる (魚住の瀧の歸りに)

水の上に千々にくだくる屋形船の灯みつゝ涼む湯上り (日田の宿)

朝霧に行きかふ舟も彦島の松の緑もおほろけにみゆ (風師山登山)

中 野 笑 美 香

たのしきはたどりつきたるいただきで笑ひこほれて話する時

うれしきは青々澄んだ新プールはじめてはひり泳ぎまはる時

風師山ほすゝき生えし草原をたのしくつどひ我等ゆきたり

ゆつたりと大空高くそゝり立つ風師の山の姿うるはし

先生はにこにこ顔でのたまひぬ明日はたのしき遠足の日と

青白い友の笑顔が氣になつて大きな聲でさよならと言つた
 風吹けばその度毎に笹なびき山全體の動ける如し
 居残りし友に土産の薄折りてドライブウェイを駈け下るゝかな
 友達はもう頂上ねと言ひながら竹にすがつて深刻な顔
 晝休み空を仰いで遊ぶ時土運びなどした頃を思ひ出す

中
村
節

夕闇の山路歩けばくちなしの寂しき花の香こそすれ
 二人して丘にのほれば名も知らぬ小さき花に心ひかるゝ
 みちばたの名もなき花が氣にかゝりたづねて見たり赤き花の名
 いさかひし友の言葉が氣にかゝり秋の哀が深くなりたり
 水引の花はなきかとさがしつゝ友にきゝたり遠足の道

中
原
國
子

鳩小屋より放してやれば嬉しげに輪をゑがきつゝ、大空にとぶ
 プロペラの音勇ましく飛行機はすみ渡りたる空をとびゆく
 プロペラの音をきゝつけて弟は飛行機飛行機と庭にかけだす
 朝夕に我の育てしコスモスの咲けるを見ては一人ほゝ笑む
 つかれたる足を休めて見渡せば今を盛りと秋草茂れる

鍋
山
美
佐
子

白雲の靜かに流るゝ秋空に氣球の垂るゝ文字のあざやか
 晴れ渡る大氣をあびて萬國旗競技も今やたけなはと見ゆ
 秋深く人影見えぬ公園の椅子に音なく木の葉ちりけり
 波白き大海原を見下してひらくひるけの心たのしき
 笹原に嬉々と戯るゝ我が友の聲さはやかに溪にこだます

萩尾花手折りて登る一同の心は高き風師めざして
 皎々と月は照りたり海の上に銀のうろこの光るにも似て
 朝日さす鏡の如き海の果空につづきて波靜かなり
 頂に立ちて見渡す我が頬に風師の山の秋の風吹く
 流れ出る汗をふきくゝ登り行く風師の山にすゝき分けつゝ

西田和子

紫の色も懐かし高原の秋思はるゝ龍膽の花

西田保子

買うて來し蝶螺掘りつしみくゝと磯の香をなつかしみけり
 深々と露を吸ひつゝ紫の桔梗は今朝の霧に咲きたり
 誰が行きし月見草咲く海岸の砂丘に残る小さき足跡
 野菊あはれ口笛のごとふるへつゝ白き花瓣の散り果つるかな

野中康子

灰色の空にふさはしき工場の六時の汽笛きゝつゝ急ぐ
 ベルリンの空にかゝけし日章旗立てよ若人スポーツ日本
 さびしさに立ちいでてみる庭隅に露をふくみてはぎの花咲く
 故もなく只ものさみし灰色の雲たれ下る冬の夕ぐれ
 かたくともたゝかば遂にひらかるゝ扉ありとは知りつゝも我

野村房子

いふまじと腹立たしさをこらへをる我が寂しさをやるすべもなし
 夜更けて雨は晴れたりさびしきはひそかに落つる雨垂の音
 いさかひし今宵なれどもはらからと枕並べて寝るは楽しき
 秋雨の落葉に濺ぐ音淋ししづけき音のひそかなるかも
 草原につかれしからだよこたへて友の背見ればかやの影うつる

蟲の音にさそはるゝまゝに出て見れば池に淋しく月影うつる
 たのしかりし移轉當時を語りつゝ思ひ出深き道を勇み行く
 海越しに遠き彼方を見渡せばはるかにそびゆる白州の燈臺
 風師山峯のすゝきが白い手であかるく我等をさし招いてゐる
 山上の岩にもたれて見下せば聯絡船の水脈ひきてゆく

畑間 サカエ

島山 千代子

開けては見閉ぢてはなでるうれしきは買ったばかりの新しい本
 落葉たく煙が枝をはふやうに傳つて行くよ秋の夕暮れ
 にぎはしきデパート出づれば暗き路あしもとに一つ虫の細き音
 おもい足引きすりやつと頂上へつけばすゝきが禮をしてゐる
 弟の紙で作つた飛行機は秋空さして飛んで行くかな

早川 恭子

コスモスの咲く日とならば癒えなむと病床の友の便り來りし
 今年こそ豊年なりと伯父上は我に語りて微笑み給ふ
 田の面は金色に照り山巖は紫紺となりて夕陽沈みぬ
 工場の煙に空は被はれて淡紫に山は霞めり
 稻の穂は低く垂れるて豊かなり田舎は秋の祭りも過ぎぬ

原田 幹江

ほゝけたる土手のすゝきの繁みよりこほろぎの音かすかに聞ゆ
 今日もまたやゝ色づきし田の中をのろき炭車の走り行く見ゆ
 落葉掃く手をば休めてふと見れば椿のつほみふくらみてをり
 秋風の氣持よく吹く丘見れば細き煙の立ち上る見ゆ
 思ひ出の萩咲く頃となりにしが過ぎし昔の夢は歸らず

深田ふじ江

ひなびたる花にまじれるガーベラのあまり赤きが胸にしむなり
 氣まぐれに小川に入りて目高とる手に流れゆく秋の雲しろし
 口あけて浮きつ沈みつわが弟遊佐の型だとしぶきあけつゝ
 つかれたる目にすがすがしコスモスの眞白き中のわづかなる赤
 しづかなる午後の空氣にコスモスのやさしき姿なびかせてをり

古野 晶子

たのしみは家内一同涼み臺昔話に夜を更かすかな
 展望臺に上りくゞて見渡せば水上飛行機翔りゆくなり
 運動會したしと思ふわが心あきらめつゝもあきらめきれず
 體操の綺麗に出来る様見ては自分の出来ぬ體うらめし
 大風に二階の窓より見下せば波止場の上を波こゆるかな

久 森 靖 子

はりかへし障子に映る秋の日や門に小さき子等の下駄音
 光榮の晴の旅路に向ふなる君が幸をぞ我は祈れる (オリムピック代表選手へ)
 遠足のキャラメル二ツ妹に残し置きたり家路急ぎぬ
 教室の窓にもたれて唯ひとり空を見て居りいさかひのあと
 休憩の言葉も嬉し草むらの水の流れにはや手を浸す

藤 野 敏 子

秋の田を汽車の窓より眺むれば千疊敷の座敷とも見ゆ
 秋の日の楽しき遠足一日の身のつかれをば汽車にて休む
 家々の燈火遠近またゝきて早や暮近し樂しかり日よ
 次小倉と誰か叫べばその聲に夢からさめて我胸をどりぬ
 遠足をへて乗込む汽車の中進むにつれて靜かになりぬ

姉のひく琴の音色のさえわたり夕べの風にひゞき来るかな
 朝顔の花小さきを見るにつけ淋しき秋が身にしみるかな
 ふもとより高くそびゆる山を見て心は躍る氣は山の上
 生ひ繁る木々により添ふ萩の花色きはだちて我の目を引く
 青空にとんびの舞ふを眺めるて我は思ひぬ飛行機の事を

星出富美子

堀田 脩子

風師山上より見れば關門に行きかふ船も玩具の如し
 新しき校舎の中に香りよきいろとりんゝの花置かれてる
 氣持よく澄み渡りたる大空に高くのびんゝと鳥の飛び行く
 頂上に上りて見れば眼の前に大き一塊の巖すわれり
 登り行く山路にそひてすゝきの穂遙かに續くなびきあひつゝ

松井スエ子

夏逝きてはた又秋も去らんとす我は今まで何をしたるぞ
 崖端にたゝすむ我の後より短き秋はくれなんとする
 行きすぎし人をば我は追へるなりなつかしき師に似たるその面
 空高くのどけくすみし秋空にいらか競へる遠近の家
 靜かなる海水浴場眺むれば盛りの夏の偲ばるゝかな

松尾 節子

夜の雨霽れて明るしつらなれる峯をつたひて白雪のゆく
 朝まだき門邊に出でて幼子が父を送れる聲訝えて聞ゆ
 あまりにも強き光に紫陽花の花うなだるる午後の庭先
 苦勞して登つた頂上そよ風が肌寒いまで氣持よく吹く
 登り来る人の顔みな汗ばみぬ清きそよ風心地よく吹け

有りし日の叔母上をしのぶ人々の言葉さびしも初盆の夜
 朝露にぬれし山道元氣よく栗を探すとさゝめきあへり
 楽しみの修學旅行も目前に迫れる人の心を想ふ
 誰もぬ家に来て見ぬ唯ひとり夕顔一つ淋しく咲けり
 見下せば岡の上にて輪をゑがき鳶はのどかに空高く舞ふ

松田和子

松永和子

我が家の机の上のコスモスが今日も笑顔で我をまちたり
 いつの間に博多につきしか汽車の旅楽しくさわぐ友もろともに
 お辨當色とりどりのまきすしもいつしかたべたあとのさみしさ (遠足)
 山道をまだかくと友にきゝまだと言はれた後の悲しさ (九重山にて)
 弟と喧嘩をすればまけるので妹をなかしていつも叱られる

三根明子

黄昏の濱邊を行けば波の音潮の香りに心和めり
 松原の落葉を踏みて我行けば遙かに聞ゆ海なりの音
 タざれば彦島の灯のほの見えて企救の濱邊の静かなるかな
 彦島の沖の彼方に白雲の舟を覆ひて湧き立つが見ゆ
 秋立ちて枯葉目につく庭の隅ほゞづきの實の一つ残り

皆吉美恵子

飛沫上げてプールに泳ぐ人見れば逝きにし友の姿しのばゆ
 汗流し登り來たりしこの山も登りてみれば秋風の吹く
 つかれたる足をのばせば眼の下に歩み來たりし道もみえたり
 運動會喜び勇む子供等に秋空晴れて朝日輝く
 病む父を喜ばせんと床の間に一本活けし女郎花の花

宮崎 昌子

そよ風にうてなゆるがせ咲き匂ふ今を盛りの秋ざくらかな
 秋空に親しき友と肩並べ語らひさわぐ風師の頂
 つかれたる足をのばせば松の根に一匹のかにのんびりとはふ
 澄み渡る山の端そめて眞赤にぞ柿實りをる秋の遠足
 ひろくと黄金波打つ秋の田にやぶれ笠さすかゝし立ちをり

武藤 節子

窓に見る四邊の景色變り来て新校舎もやゝ色古りにけり
 本館の建築日毎に進み行き吾等望の日も近づきぬ
 病床に美しき朝顔咲ける見てせめても夏を味はひにけり
 青々と澄みしプールに今日も又健康さうな友どちの群
 靜かなるプールにひとつ水すまし一心に水を澄まし居にけり

室住 千枝

集ひ合ひし友みな歸る庭先に虞美人草は赤くゆれたり
 いざさらば青海原の果遠く白雲浮ける脇の浦邊よ
 いざ去らば笑ひ合ひつゝ過してし青海原よ濱の眞砂よ
 白赤のか弱き花を手折りつゝ踏みにじりつゝ嵐は過ぎぬ
 胸をうつ虫の聲のみひゞくなりあらしの音は遠き山の端
 月影はくだけゆくなりほのじろく波頭見ゆ暗き海原

八百喜美子

ほつとして我に返れば池の面に金魚は深く息づきてをり
 いさかひし身は悲しかり返すべき言葉のあれど黙して言はず
 いつか又雨となりゆく街道に誰にやあらむ傘さゝずして
 焼く餅のにはひかぎつゝ外見ればこの秋の夜の雨はやみたり
 流れ木は佗しからずや一日を浪枕して幾月か經ぬ

思ふまゝ、仕事もすみてこの夕べ父母と語らふこのたのしさよ
うすぐらい電氣のついた病室に母と二人で居るさびしさよ
母上の今日も御熱の高かりき体温表を見つゝ、悲しむ
夜おそく寝むと思ひてふと聞けばこほろぎの聲さびしくきこゆ
何事もなかりし今日の日記には母の病の事を書きたり

山田 淑子

山川をはるばる越えて手紙來ぬ優しき祖母の面影を乗せて
いつも見る庭のポプラも黄に染りほのかに落つる秋の淋しさ
唯一人家路に向ふ佗しさや心に友の名をば呼びつゝ、
コスモスの群れ咲く丘に出立ちて心行くまゝ、手折る嬉しさ
つれづれに何時しか折りしコスモスのふと氣がつきて哀れなりけり

山中 マサ子

夕顔のほの白く咲く流しもと今朝一番の水を流せり
二つ三つ垣根にゆるゝコスモスにひそかにせまる夕闇の色
力なき蚊の羽音もなつかしく蚊帳つりし頃しのばるゝかな
電線にとまれる雀しづかなり朝靄こむる八幡の森
姉妹かたらひすぐる畦道によめなの花の今盛りなり

吉元 浪子

亡き友とありし夕べの語らひは此の世の最期と我思はざりき
小さき子大きな下駄をつゝかけて出たと思へば早も泣きをる
何時になく早くやすみし里の夜の電燈一つ心ほそかり
深耶馬の山奥深く今もなほ群り棲みて猿居りといふ
あらたまの年の始めも近づきて定期考査のつらさ覺ゆる

二
年
集

網中美佐江

我が着せし赤きかのこの振袖に舞へるはゆかしお人形
 青々と生ひ茂りたる濱松の葉越に見ゆる廣き海原(西戸崎にて)
 稻の穂の黄金に實りて秋風のそよかに吹きて小波の立つ
 夕闇のせまりし窓より眺むれば垣根に白きコスモスの花
 名も知らぬ庭の小草に白露の靜かに下りて夜は明けにけり

浦上千枝子

コホロギの一しほ淋しき夕月夜かすかにきこゆる尺八の遠音
 心地よし我が漕ぐボートは海原のしぶきを上げて進み行きつゝ
 母上のたんせいこめし朝顔の今朝も九つ競ひて咲ける
 夏の日の強き光を浴びながら波おしきりて泳ぐ子供等
 美はしき海ながめつゝ我は今ひるけたのしも中道に来て(西戸崎にて)

いそしみの學びの道の爲なれど胡蝶追ふ日の暑さきびしき
 ひつそりと淋しくなりぬさわぎ居りし妹もねつ弟もねて
 たそがれの尾花が元に月をちて糸より細き虫の音を聞く
 氣がつけば机叩きて歌ひ居りラヂオの軍歌に拍子とりつゝ
 無花果の日毎散り敷く落葉かな掃く人もなし北風の吹く

山下眞理子

思出もなつかしかりき舊校舎のアカシヤ黄葉散りそめにけり
 線香の煙靜かに立ちのほる地藏堂さびし秋の夕暮
 凱旋の兵士を迎ふる子供等の打ふる旗は町にみちつつ
 凱旋の兵士をむかふればいつしかにほゝをつたふるあつきものあり
 今年は残り少なになりけり空しくすぎし思出のさびしも

中村悦子

唯一人留守居する夜のさみしさに蜜柑の筋を火にくべてみぬ

紫の雲に彼方はつゝまれて朝の海は美しきかな

夜の海はこゝやかしこにいさり火が小さく見えてしづまりかへる

朝鮮の歌大聲に唄ひつゝ夕陽の道を子等通りゆく(京城にて)

さむくと陽はしづみたり秋の日はや燈火もちらほら見ゆる

吉井敏子

庭の柿鳥が食べに来る度に庭をよごして逃ぐるなりけり

朝起きてふと庭見れば桐の葉はゆふべの風に皆ちりにけり

けんかして一人遊びの淋しさに紙ちぎつては合はせてぞ見る

算術の問題解けしうれしさに仰向けになりてねころびにけり

掃除して机の置場かへ見れば去年なくしたメタル出で来ぬ

あかあかと燃ゆる焚火に見も知らぬ自轉車の人も降りてあたれり
 歩みつゝかへり見にけり霜白き今朝の地面の吾の靴跡
 久々に友と語りぬ手の荒れを火鉢の上に比べ合ひつゝ
 朝風の吹きくる窓のすがしさを心あらたに机に向ふ
 露光る野邊の草道わけ行けばあたり静けくコホロギの聲

藤野 延子

進 來 和 子

學校の堀にはつてる葛の葉はおほかた赤く色づきにけり
 縁先に腰をかけると夕暮の涼しい風がそよそよと吹く
 夏の夜友達よんで弟は庭一ぱいに花火をまはす
 頭まで手をふり上ぐる一年生幼きことを思ひ出すかな
 アンテナのくされた棒をきつゝきが虫を取るのかコツコツたゝく

永 野 敦 子

子供らは曆をはぐり正月もあと幾日とよろこんでをり
 妹のかはゆき寝顔をながめつゝにつこり笑ふ母の顔かな
 木の葉舞ふさびしき秋の庭の隅春の若芽がはや萌えてゐる
 なつかしき友のふみをばうけとりておそろくもあけて見るかな
 さむき朝窓ごしに見ゆるいちぢくのうれ残りたる小さき實かな

伊 木 玲 子

晩秋の庭面に咲ける山茶花のぼらくと散る朝の静けさ
 お留守番一人筆執る耳許にかちく聞ゆる時計淋しき
 うらゝなる光を受けて川端のかへで眞赤に映えてうつれり
 さらくと流るゝ水の波の間に赤きもみぢの漂ひて居り
 赤や黄に色づきにけるもみぢ葉の散り行く秋の心淋しき

中村タヅ子

楽しみは我植ゑたりしフリーヂヤの日毎延びるを見に行くその時
 温室に行きて他のと見くらべる我植ゑたりしフリーヂヤの丈
 今日も亦暮れ行く空を眺めつゝ幼き頃の友を思へり
 飽くまでも清く澄みたる秋空に雄々しくぞ立つ帆柱の山
 學び舎の歸りは必ず温室に足を止めてフリーヂヤを見る

福江マスエ

秋の夜に冷く光る星の影見つゝ偲びぬ亡き師の君を
 畦道を一人歸ればこほろぎの鳴く音淋しく聞え來にけり
 秋の夜に過去のことなど思ひつゝ一人淋しく床に就きけり
 過ぎし日に幼き我を導きし師の命日よ今日は悲しき

松下茂子

暖き炬燵圍みて冬の夜に食べる蜜柑の味のよきかな
 朝起きて外眺むればさ庭べの松の梢に雀囀づる
 朝寒を木々の梢に囀づれる雀の聲の元氣なるかも
 しとくと雨降る中を小雀は枝から枝へ飛び移り居り
 南天の雪を落せば赤い實がほろりと落ちた冬の夕ぐれ

卷 末 に

本歌集の出詠者は三百十七名、歌は一千六百十一首を収載してゐる。

第一歌集が出来てからはや四年の歳月が流れた。當時一年生であつた方々が今は四年生となり、卒業が既に目前に迫つてゐる。

慌しくも過ぎゆく月日である。今少し何とか努力したいと思ひつゝ、何もしないうちに、四年間の長い歳月が夢の如く過ぎ去つた感じである。三年でも五年でも、何もしなければ何も出来ないまゝに暮れてしまふ嘆をこゝにも感じさせられる。

特に女學校に於ては、教師も忙しいし、生徒も多忙である。時に短歌をやりませう、吟行を思ひ立つては、といふ特志の方があつても、なか／＼實行に移せないやうなところがあり、正課の時間をこれに割くことも殆んど出来ない状態であるが、多数の先生方、生徒諸子の協力によつて、こゝに第四歌集が出来上つたことは私らの喜とするところである。

今度の歌集にみるに特に三年生は多数の方が出詠され、四年生は全員二百一名の出詠を得た。従つて玉石混淆の感じもあらうが何か微笑ましいものを感じる。たとへ、「曲りなりにも」といふところがあるにせよ、一人残らず和歌を詠んでこの學校を出てゆかれることは愉快である。中には随分うまい人もあるし才分に恵まれてゐる方もあることであれば、卒業後、おのがじしの境遇に身をおいてそれ／＼の修養の道にいそまれる中に、この和歌の道についても更に精進されて、その才能を磨き、自己完成への伴侶とされたいことである。

昭和十二年一月二十二日

編 者 識

昭和十二年三月十五日印刷
昭和十二年三月二十日發行

【非賣品】

編輯者 福岡縣小倉高等女學校
發行者 松 尾 恒 次

印刷者 京都市下京區西洞院七條南

内外出版印刷株式會社
代表者 須磨勘兵衛

發行所 福岡縣小倉高等女學校喜久短歌會

369
372